

特252

690

國樂振興會
創設委員 五十嵐悌三郎著

洋樂の羈絆を脱せよ

3

1

始



特252
690



五十嵐悌三郎著

洋樂の羈絆を脱せよ

大日本國樂振興會創設事務所發行



大日本國業社與會館發行



皇國の興隆を期す



はしがき

亞細亞の東 日出づる處
 聖の君の 現はれまして
 古き天地 とさせる霧を
 大御光に 限なくはらひ

これは、我等一億の國民が、常に、欽慕敬仰致しまする、明治の大御門の、偉大に亘らせられる御治世を偲び奉る我等のお祝ひ日「明治節」の祝歌第一節の冒頭である。

明治の大御世、これは、實に、我が大日本帝國の眞實の甦誕でありましたのであると共に、又、世界史の、方向指正の爲めの轉換の、重大なる素因でもあつたのである。

爾來七十年、我が、大皇國は、種々の艱難を、絶えず克服し、そして、重壓の羈絆を、一つ、一つ、脱却して來たのである。

由來、我が日の本は、常に、眞實に誠の道に立ち、謙讓以て他をも十分に立て來れる君子國である。外つ國にして、常に、誠心を以て我に接してゐるならば、永久に、大御歌さながらなる「波風たたぬ、四方の海」が、必ず實現せられる筈である。

しかし、しかし、假面は、一枚、一枚と、はぎ去られたのである。周圍の醜き彌縫の故に、而して、我が大皇國の、燦たる光輝のために。見よ。

○滿洲國の創建を。又、

○國際聯盟の脱退を。而して

○超非常態勢の現實を。

これ等は、孰れも、因習的羈絆脱却の大表現なのである。

然らば、我等の切實にして深刻なる魂の情趣の表現である、即ち、精神文化の中核である、我が音楽文化の現状はどうであらう。

○毎朝放送されるあのラヂオの音楽は。

○勿體らしく名づけられてる所謂國民歌謡は。

○赤裸に言ふならば、國を擧げて、歌はしめられてゐる愛國行進曲でも。

何と言ふ、焦燥な氣分に充ちてゐる事だらう。品位の顯現など、何處に存してゐるのか、しかも、その情趣の淺薄さは。

而して、その根本的原因是、音楽構成の總べてが、西洋音楽の手法に、完全に壓倒せられてゐるからに外ならない。

もつと、もつと、達觀するがよい。そして自問するがよい。「果して、我等には、何物も無いのであるか」と、然るに、その答は、

否、否、正しく、そして美はしい、眞實の音楽の基礎。それは、我が大皇國には、豊かに存在してゐるのである。只ある丈ではない。我が日の本にのみ育つてゐるのである。

諸君、先づ、羈絆を脱して、自らに歸らうではないか、而して、自らその主人となり、決然と、躍進大日本の姿さながらなる、大日本の「國樂振興」の第一歩を、強く踏み出さうではないか。

皇紀二千五百九十八年三月一日

洋樂の羈絆を脱せよ 目次

- ◎我等は洋樂に満足し得るや……………(九)
- 我等を恍惚たらしむるものは……………(九)
- 我等何故に瞠目せしめらるゝか……………(一五)
- 而してあき足らざるその理由は……………(一八)
- ◎音樂の構成要素を考究せよ……………(二三)
- 如何にして音樂は發生するか……………(二三)
- 音樂の中心的構成要素は……………(三二)
- ◎西洋音樂の缺陷を悟れ……………(三七)
- 先づその根據を究めよ……………(三七)

- 又その發達の跡は……………(四二)
- 而して致命的缺陷は……………(四六)
- ◎日本人よ自らを知れ……………(五五)
- 我等の現在を視よ……………(五五)
- 而して祖先を想へ……………(六〇)
- 何故に大いに自覺せざる……………(六三)
- ◎我に絶妙の旋律あり……………(六九)
- 我が情趣表現の母胎を見よ……………(六九)
- 不完全極まる在來の理論……………(七六)
- 美しき哉我が旋律の構造……………(八六)
- ◎須らく羈絆を脱すべし……………(九三)
- 洋々たり我が國樂の前途……………(九三)

- 先づ自らその主人となれ……………(一〇三)
- 而して總べてを活用すべし……………(一一三)

◎我等は洋樂に満足し得るや

○我等を恍惚たらしむるものは

世界的名手の演奏を、帝都の、最もよき演奏堂に於て靜聽する。我等は、先づ、何に捉はれるのであらうか。

○樂曲の好きにか。

○演奏技巧の素晴らしさにか。又は

○曲の解釋の完全なるためにか。

但し、聽衆は、勿論、専門家のみではないのだ。随つて、その曲は、どんなものであるかさへ知らぬ場合が多い筈である。だから、知らぬ曲の解釋などはもとより、演奏技巧の素晴らしささへ、専門以外の者にとつては、わかりつことがない筈である。それから、樂曲の好きと言ふ事になると、全くつまらない曲などは、誰だつて演奏しないのだから、これは、聽き手の、す

きずきと言ふ、あはい氣持がはたらくにすぎまい。

しかも、名家の演奏に、殆んどすべての聴衆が捉へられるのは、何であらうか、曰く、單に、「音色だ」「音色だ」と、斷言して差支ない。

名演奏とは、その樂曲の解釋に於いて、また、演奏技巧に於いて、寔に、素晴らしいものである事は、もとより當然ではあるが、しかし、滿堂の聴衆を、より速かに、そしてより切實に、キヤツチするものは、あの、譬へがたい絶妙なる音色なのである。

惻々として、胸に逼まるが如き

切々として、魂に訴へるが如き

かゝる妙音、これこそは、名手の名手たる、最初の妙技の表現なのである。

管絃合奏を聴く事にする。生のものを、ぢかに聴ければ、これに越した事はないが、世界一流のものを、生で聴く事は、一般には、到底、望むべくもない。残念千萬だが、まあ、せいぜい我慢をして、レコードにして置く。

何故に、日本人の合奏と、西洋人の合奏とが、あんなに、違つて感じられるだらうか。これ

も、答は、簡單だ。肝甚なポイントは、やはり、音色の相違にすぎない。つまり、

○先方が、極めてよい音を出すのに

○こちらは、なかなか出來得ないのである。

管絃合奏に於ける、總體的なる「音色の好き」、日本人は、まだまだ「未だし」である。原因は、日本では、餘程もの判りの良い人達でも、

「音樂は米の飯より大切でない」と

思つてゐるように、音樂的には、まだまだ、極めて幼稚であるからである。

だから、日本の演奏家は、素質は、決して、西洋人に劣つてはゐない筈だが、環境や、教育が、甚だしく恵まれない爲に、どうも、練習が、まだまだ、至つて不徹底であり、出來てゐないと言つていい。だからと言つて、この事は、決して、日本の演奏者の不勉強を意味するものではない。根本は、

○もつと、子供の時から、音樂的なる感覺が十分に育てられなければ、駄目なのであり、

○もつと、適當な時期から、適切にして、徹底したる教育を、確實に施さねば、到達し得な

い境域だからである。

この事は、現在ののように、音楽的教養など、全然かけてゐる政治家や、文字通りに、管見主義的な、偏屈な教育家や、何とかして、うんと金をもうけて、或は豚のように、又は孔雀のように生活すればもういいと言ふような、所謂金權至上主義者連中の、ウヨウヨしてゐる、日本の現状では、遺憾な事ではあるが、解決し得ない相談ではある。しかし、眞理は、あくまでも、そして、どこまでも、眞理なのである。

昨秋、上野の森で、某外人指揮者が、少しく、この事に關聯した問題で、憤々したといふ噂であるが、如何にも尤もな事である。と共に、目下の日本では、要求されても、どうにも仕様のない事である。だから、噂にあるような、校長さんの處置も、やはり尤もであると言はねばなるまい。

話は、一寸横道にそれたが、大體、音楽と言ふものは、演奏された時に、はじめて現はれるものである。そして演奏が済めば、あとから、あとからと、消えてゆく藝術である。

而して、演奏と言ふ事は、

○自分の聲音なり、

○演奏する樂器の音によつて

なされるものである。だから、瞬間々々の問題にして考へると、一音、一音（ピアノやオーケストラなら、一ハーモニーとか、一音群と言ふ事もあり得る筈）の連続なのである。だからその演奏にとつての、根本である、一音、一音、の美しさ、その美妙さや、絶妙さが、まづさきに、聴者のハートをキャッチするのは、これ當然な事である。

タイムや、メロデーが、如何に、正確でも、破鐘やぶかねをたたくような獨唱や、耳をえぐられるような、ヴァイオリンなどは、およそ、聴き手のある筈がない。（但し、哲人的な、音楽狂があれば、これは別である。）

日本は、大へんお寺の多い國である。あのお寺の、どんなところが、有難いのだらう、耳の上からの有難さを、とくと考へてみよう。

○もとは、朝な夕なに、殷々と、ひびいてゐた、上野や、浅草の、あの梵鐘の音。

○それから、あの伽藍に共鳴して、壯嚴にきこえる、讀經のパス。

○木魚や、種々の鐘や、鉦や、鈴の、リズムカルな、ひびき。

それらの、一つ一つに徹するような、所謂お寺らしい妙音、こゝにも、随分、有難さの種が、宿されてゐる筈である。

小鳥の好きな人々の、小禽愛玩の理由の妙所の多くも、やはり、あの、得も言はれぬ、可憐にして、いぢらしい囀聲の音色にある筈である。

音色、よき音色、絶妙なる名手の演奏する音色。これこそは、我等の魂を、最初に恍惚たらしむる偉大なる魅力なのである。而して、演奏家たらんとする者、また、この絶妙なる音色の演出能力の鍛練。この爲めに、人知れぬ、數多の勞苦と努力を拂つてゐるのである。我が日本には、先にものべた理由から、世界的名演奏家は、目下は、まだ出ないのであるが、よく、そして、十分に育てさへしたならば、もつと、もつと、いゝ音色を奏出する、世界的名手が、必ず出現する筈である。

要するに、音色は、演奏技巧の中核をなすものであつて、これこそは、聴衆の魂を恍惚たらしむる最初の條件なのである。

○我等何故に瞠目せしめらるるか

洋樂と、名前をきいた丈で、少しくインテリであると、自信してゐる人々は、心をひかれるようだ、それが邦樂と對立的に考へられるときには、特に際だつて感じられる。

○洋樂が、如何にも、文化的で、開けてもぬ、進歩的な人々の音樂であり、

○邦樂と言ふのが、どうも、因循なサークルの人々の、音樂的にはまだ育てられてゐない人々のみのもののように、

感じられてゐる。その理由は、何であらうか。即ち

「我等何故に、洋樂に瞠目せしめられるのであるか」

これを、靜かに、比較して考へる事にする。

従來の、日本の獨唱（語り物は除外）、三絃伴奏の場合ならば、やはり、獨唱者に、伴奏者が附添つて行ふのであるが、大體、曲そのものの、組みたてが、いゝ加減であるし、獨唱と伴奏との組み合わせも、あまりに單純すぎる。つまり、所謂つれ弾きと言ふ程度である。日本人のよ

く言ふ「感」では、作曲してゐるだらうが、樂音の理論を十分自らのものとした上での組織ではない。だから、洋樂の獨唱に比較すると、きはだつて、見劣りがする。(こんな事を言ふと、レコード會社の所謂流行歌手に、叱られるかも知れないが)

お琴伴奏の獨唱、これまた妙である。あれは、どちらが伴奏なのか、一寸解釋に苦しまねばならない。琴の音が、盛んに躍り出す、歌聲が、微かにきこえるようだ、大切な歌ことばは、ちつともわからない。どうも、組みたてが、しつかりしてゐない。お琴伴奏の場合は、どこまでも、

○まづ「歌ことば」即ち詩歌あり、次に

○歌聲あらはれ、而して、

○箏音によりて、切實に内助すべきであらう。

これが、洋樂の獨唱になると、その組織が、まことに、堂々とそして判然としてゐる。獨唱が堂々たるのみではない。伴奏が、如何にも、整然として、内助の功を十分に完うしてゐるのである。

合唱、これは、従來の邦樂には、全然ない現象である。だから、大合唱に壓倒せられるのは、もとより當然である。簡單な組みたてでも

○混聲合唱

男聲の部 (バス(低音)
テノール(次中音))
女聲の部 (ソプラノ(高音)
アルト(中音))

である如く、樂音の原理にもとづく、まことに見事なる組みたてである。これは、在來の日本音樂にのみ慣れてゐるものをして、心底から、瞠目せしむる要因なのである。

況んや、管絃大合奏の如きにあつては、たゞ、あれよ、あれよと、目を見はるのには、當然すぎる程當然な事である。その組合せを、極く簡單に表はすと、

絃樂器の組合せ

木管々樂器の組合せ

○管絃合奏の組合せ

金屬管樂器の組合せ

特殊樂器群の混入

打樂器の組合せ

斯く申すと、日本にだつて、合奏がある。

○所謂、俗樂の三曲合奏や

○能樂の、嘶子入りの謡ひや

○雅樂に於ける、古式の合奏が

日本的な、雅とか、趣とかの點は別として、これを樂音の原理上から研究してみると、誠に物足らない。邦樂全體に互つて、斯うした方面の研究は、全然なされてゐないのである。

然るに、洋樂に於いては、どこまでも、音の原理に根據を置いて、音樂構築をやつてゐる。即ち、しつかりした、そして大きい組みたてによる、作曲をなし、それに相應はしい組みたてによる演奏を行つてゐる。この事が、恍惚たらしむる次に、吾等を瞠目せしめる偉大なる要因なのである。つまり、立派な組織を有してゐる事がそれである。

○而してあきたらざる理由は

卓越せる名家の洋樂演奏をきいて、その絶妙なる音色に恍惚たり得、組織極めて良好にして

整然たる大演奏に瞠目せしめられながらも、何故に、心の奥底に於いて、あきたらないのであらうか。

この事は、日本人の誰もが、もつと眞剣に考へて見る必要のある事なのである。一體近頃の人々の、「人生觀」と言つていゝか、「生活理想」と言つていゝか、斯うした方面を注意してみてゐると、まことに、索漠たる感を抱かせられるようである。

○一體、何を目あてに働いてゐるのか。

○一體、生活の理想は何であるのか。

○毎日、生活してゐる事の意義は何なのか。

こんな事をきかれて、はつきり、しかも、如何にも「萬物の靈長として恥かしからぬ答」をなし得る人が、幾人あるだらう。よしや無いにしても、聞かれて、はつと思ふ人位は、相當になければならぬ筈である。

○たゞ、らくに食へばいゝのだ。

○年をとつてからでも、極めて安樂に

○自分の子供達も、またその通り

これ丈では、人としての意義は、少しも感じ得ないではないか。空ゆく鳥や、山野に棲む獣と、あまり變らない事になる。

話をもとに返すが、兎に角、ほんとうの日本人にとつては、どんな洋樂をきいても、

○絶妙なる音色に恍惚たり得ても

○偉大なる組織に瞠目せしめられても

○最後は、どうも、あきたらない、即ち、切實なる満足感を抱かせられないのである。

これは、當然な事である。靜かに、日々の我等の周圍に關して、考へてみるがいゝ。

○あの、毎朝、ラヂオ體操前後の、騒々しさのみに充ちた、洋樂風の樂曲の放送や

○何處に、日本人らしい情趣がもられてゐるのかと、問ふて見たいような、所謂「國民歌謡」

○國中が、大さわざに、もてはやしてゐるようだが、ちつとも、日本人らしい感じのしない

「愛國行進曲」

この三個の事實を考へて見るがいゝ。果して、誠に、我が意を得たりと言ふような氣持にな

り得るであらうか。

○高雅なる、我が國民の深い心持

○優雅なる、我が民族の魂の切々たる情趣

この二つの何れもが、前述の三種には、全く盛られてゐない事を、私は、決然と斷言する。そして、讀者諸君も、きつと同感せられるに違ひない。

然らば、何が、あき足らない理由となるのであるか、これは、音樂の中核であり、生命であるところの旋律構造、即ち、「ふし」が、「メロデー」が不完全だからである。後來詳説するが、

○西洋音樂の旋律構造の母胎である音階は、性格を表現するためには、イ、不完全であるし

ロ、機械的である。

○日本には、もつと本質的なる旋律構造の母胎としての音階が、儼として育成してゐるのである。

常々、本質的に、劣つてゐるものに慣れてゐるものが、素性のよいものをきけば、あゝと、びつくりする程、満足するにちがひないが、その反對の場合は、よしや、他の外的條件がよく

ても、なかなか、さういふわけにはゆかない。これが

○徹底したる演奏に満足し

○きはだつて立派な組立てに感心しながら

○旋律構造が劣つてゐるがために、どうしても、みち足り得ない、理由である。

だから、私の結論は、人は、大膽すぎると、言はれるかも知れないが、

「我等は、絶対に、洋樂に満足する事能はず」と、切實に、斷言する者である。而して、理由は、上來、繰返して言つてゐるように、洋樂は、

○演奏法に徹底してゐる事、まことに好し、

○樂音の原理に即したる、整然たる音樂構築、これ亦、甚だ好し。

○但し、音樂構造の、中核要素である、旋律構造の不完全なる、吾人、到底満足する事能はざるなりと。

これ、洋樂に満足する能はざる、根本的理由である。

◎音樂の構成要素を考究せよ

○如何にして音樂は發生するか

生活、我等の生活、萬物の靈長としての人の生活、これは、通常、「文化」なる文字によつて、表現せられてゐる。而して、この「文化」なるものゝ内容は、人類と生命との關係より考へて、

○生命の目標である、眞理體現、即ち、人としての理想の顯現である處の「精神文化」と、

○生命を維持する上に於いて、必須缺くべからざる、廣義の意味に於ける經濟、即ち「物質文化」

の、二つに分ける事が出来る。近時よく言はれる處の、「理想なき生活」とは、實は、經濟に、全く壓倒せられたる、換言すれば、人間の姿をもちつつも、その眞の意義に於いては、人

間の生活をなし得ざる、即ち、「物質生活」にのみ捉はれたる生活状態を指摘してゐる言なのである。富者も貧者も共に。

而して、音楽は、實に、眞理體現の中の、樂音の原理による、眞理象徴なるが故に、當然、「精神文化」の中に包含せらるべきであるのみならず、實に、魂の顯現なのであるから、その中核をなすものである。

然らば、如何にして、音楽文化、即ち、生活としての音楽が発生するものであらうか、この事に關し、十分なる省察を試みよう。

先づ、人間生活の根原をなすものは、常に「まこと」であり、「まごころ」である。而してその生活表現にあつては、常に「ことば」である。契沖師の「有事必有言、有言必有事」は、この事情を、明らかに説きあかしてゐる。尙ほ、この關係を、各國の古典なり、宗教上の典據なりにみると、まづ

支那に於いては、周禮の大司樂の註に「發端曰言、説述曰語」と言つてゐるし、

佛教に於いては、「善言、善語」と言つて「妄言、妄語」すべからざるよう、大いに奨勵し

てゐる。

古代ギリシヤに於いては、プラトーンをして「生ける魂ある言葉」

キリスト教にあつては、舊約の創世記に「太初に、道ありき」と、斷言せしめてゐる、而して、

我が、大皇國にあつては、柿本人麿をして

「敷島のやまとの國は、言靈の、佑くる國」と、嘆稱せしめ、又、山上憶良をして、

「空みつ、倭の國は、皇神の、いつくしき國、言靈の、幸はふ國」と、祝福せしめてゐる。

だから何れの國に於ても、この言葉の表現が、人の生活として、甚だ、重要である事を、明證してゐるが、なかんづく、我が國に於いては、特に、「言靈」と、稱して、その表現に、深く意を致してゐるのは勿論、一步進んで、神聖なる意味をさへ加へてゐる程である。(この點、現代の人々は、少くとも、今少しく反省を要するようには思はれる。)

この、言葉の表現様相に關して、少しく詳細に考察してみよう。言葉の表現に「つぶやく」なる様相が存在してゐる。これは、言葉としては、全く、「非現實的」なる様相であつて、こ

くあさはかな、不平を減らす事より、深刻なる、いのりごとに至るまで、總べて、極く、ひそやかなる個人的表現である。したがつて自己以外には、現実的には、相關係する事なき表現である。或る意味では、言葉以前の言葉とも考へられるあらはれである。

次には、最も言葉らしき言葉、即ち、相手を豫想してゐる表現様相である。即ち、「はなす」、「かたる」が、これである。これは、共に、理智的でもあり、批判的でもあつて、自己以外の一人、或は多人數を相手に表現する様相である。したがつて、その表現は、他人にも、理解せられる生活であり、表現であらねばならない。つぶやくに比しては、はるかに高度の、表現と言つてよい。

次には、自らの、切々たる心情の伴ふ表現であつて、これを、「詠み」の表現と稱へる。これは、やむにやまれぬ心情からの、生活様相であつて、言靈の、より深き表現である。古人は、こゝに於いて、「言靈の精が出現する」と言つてゐる、「俳句」「短歌」「詩や民謡や童謡」それに「漢詩」等、すべて、これ言靈の精のあらはれである。

○君が代は、千代に八千代に、さざれ石の

いはほとなりて、苔のむすまで

これは、我が、大皇國々民の、心の奥底を流れてゐる、「まごころ」にもとづく、肇國以來の、最も深刻にして透徹せる「詠み」の、生活顯現であるし、

天津日嗣の 高御座

千代萬代に 動きなき

基さだめし そのかみを

仰ぐ今日こそ たのしけれ

これは神武天皇様の 御即位をことほぎ奉る、最も切實なる、われら國民の「詠み」の生活表現なのである。

この「詠み」の生活様相を、ほんとうに、自らはもとより、衆多と共に、最も切實にして、最も深刻なる心情を以て生活しようとするとき、こゝに、「歌ふ」なる、言靈の最深、最高の様相があらはれる。

この「歌ふ」生活こそは、實に、言靈の精の精の顯現なのであつて、世の聲樂家なる者、深

く思をこゝに致すべきである。

而して、「詠み」と「歌ふ」生活は、共に、あくまでも、情趣の世界のものであつて、「はなす」「かたる」が、批判的なるに對し、絶對的な表現なのである。だから、深さ、高さに於いて、はるかなるあらはれであるから、言葉以上の言葉と言つて差支ない。すべての關係を表に示すと、

○言靈の様相

○陰微なる表現 ↓ つぶやく(咳)非現實的 ↓ 言靈以前

○理智的な表現 (はなす) (話) 對個人的 (かたる) (談) 對衆多的 (言靈顯現)

○情趣的な表現 (よむ) (詠) 個人的 (うたふ) (歌) 衆多的 (言靈の精顯はる)

而して、この情趣的なる表現こそは、これ、音楽、若しくは、音楽的なる要素の隨伴する事によつて、顯現する言靈の様相である。古人の言へりし「はじめにリズムありき」とか「言葉のつくるところ、音楽のあらはるゝところなり」等は、よく、この間の事情を物語つてゐる。

然らば、共に、情趣的なる様相である「詠み」と「歌ふ」との間に於ける、最も重要な相違點は何であらうか、

○「歌ふ」生活は、あくまでも、明瞭なる性格が、顯現してゐなければならないのに

○「詠み」の方は、さまで深く、要求されてはゐない。

この關係を、一般社會の慣例に徴してみると

○最近、流行してゐる、漢詩の吟詠法

○御歌會のあとに放送された 和歌の披講法

○新しき試みのように言はれてゐる 詩歌の朗誦

その何れも、散文の誦讀よりは、少しくは、音楽的であらうが、決して、特定の性格を表現する事はない。漢詩であるならば「鞭聲蕭々」でも「山川草木」でも「去年今夜」でも同様でよいし、和歌ならば「秋の田でも」「天つ風」でも「みちのくの」でも、ちつとも變らない。

言葉の内容は如何にちがつてゐても、吟詠上、正しき意味での性格があらはれてはゐない。

それが「歌ふ」生活表現になると、そう簡單には行かない。等しく、大和歌である短歌でも、

唱歌となると、その歌詞によつての性格が堂々と表はれてくる。

○さきに、例にあげた、国歌「君が代」は、單に「詠み」のときに比して、何倍も国歌らしくなつてゐるのは、性格が、即ち、國民的讃仰なる大性格が、明瞭に顯現したからである。

○咲き匂ふ 山の櫻の 花の上に

かすみ出でし 春の夜の月

これは、四季の月の唱歌の中の、春の一章であるが、これには、また、これらしい、いゝ性格が、よく顯現して立派な唱歌になつてゐる。

この一性格的なる情趣の表現「これこそは、實に、音樂の根本的なる要素であつて、通常「旋律」と稱せられる構造である。即ちこゝが

「言葉の盡くるところ、音樂の生るゝところ」

なのである。斯くして、はじめて、音樂が発生するのである。以上の關係を明らかに表に示すと、

○はじめにあるは、「言葉」なり。

○言葉、詠まれて、その精あらはる、これ、最初の情趣表現であつて、これを「詩歌」と稱する。

○詩歌、歌はれて、その情趣の性格完し、これ、旋律の隨伴するによるものにして、言葉の精の精こゝに顯現す。これを「唱歌」と稱する。

○而して、旋律こそは、これ、音樂の根本的要素であつて、「旋律現はれて、音樂はじめて生る」と吾人が切言する所以である。

多くの人々の中には、音樂の發生を、斯くは考へない人もあるにちがいない。音樂は、最初から音樂として存在してゐたのであるとか、或は、現に作曲家は、そうした手順では作曲してゐないなどゝ。しかし、深く考へて見ると、これらは、

一つには文化、とくに、音樂文化の發達のあとを、十分に究めざるものゝ意見であると共に二つには、數多の作曲は、如何にして出現せるものであり、その作曲者は、如何なる修養をなせるかを、審かにせざるの言葉であり、

三つには、自らの修學につき、未だ、眞實の點眼をなさざるものゝ言と評せざるを得ない。

私は敢て断言する。音楽は、實に、旋律の出現によつて、はじめて發生するものであると。

○音楽の中心的構成要素は

この點、現代の、音楽構成理論は、根本的な検討を受けなければならないのであるが、一般の例では

○旋律構造

○節奏構造

○和音構造

○音色構造

と、この四つが、音楽の主要構成要素であるとして、併立的に、對等の立場に於いて取扱はれて居り、その内的關係に於いては、説明せられてゐない。この點に關し、切實に考察を加へよう。

第一に、音色構造の問題である。これは、實は、ある樂曲が、音楽として演奏せられるとき

に、關與するものであつて、内的なる作曲構造とは、(作曲上、構造上、樂器の音色を豫想するのは當然ではあるが)、直接に關係はない。だから、この音色構造なる要素は、他の三要素とは、自ら異なる、外的な表現要素である事に、特色を有するものである事を、明らかに、確認せねばならない。

第二には、和音構造である。これは、果して、旋律構造との關係に於いて、如何様なる立場にある要素なのであらう。これは、その性質上、而して又、和聲學が示してゐるように、一つには、旋律の、音樂的内容を、よりよく充足する意義を有する要素であると共に、一つには、常に、旋律に隨伴し、奉仕すべき立場にある要素なのである。ハーモニー、即ち、和聲の故に、メロデー、即ち、旋律を破壊する事は、許容すべからざる事になつてゐるのである。言ひ換へるならば、

○旋律は、あくまでも、主役であり、主人格であるし

○和聲は、補佐すべき脇役であり、かしづく夫人格なのである。

この點、日本の音樂家の中には、徹底してない向きがありはしないかと、思はれるふしがな

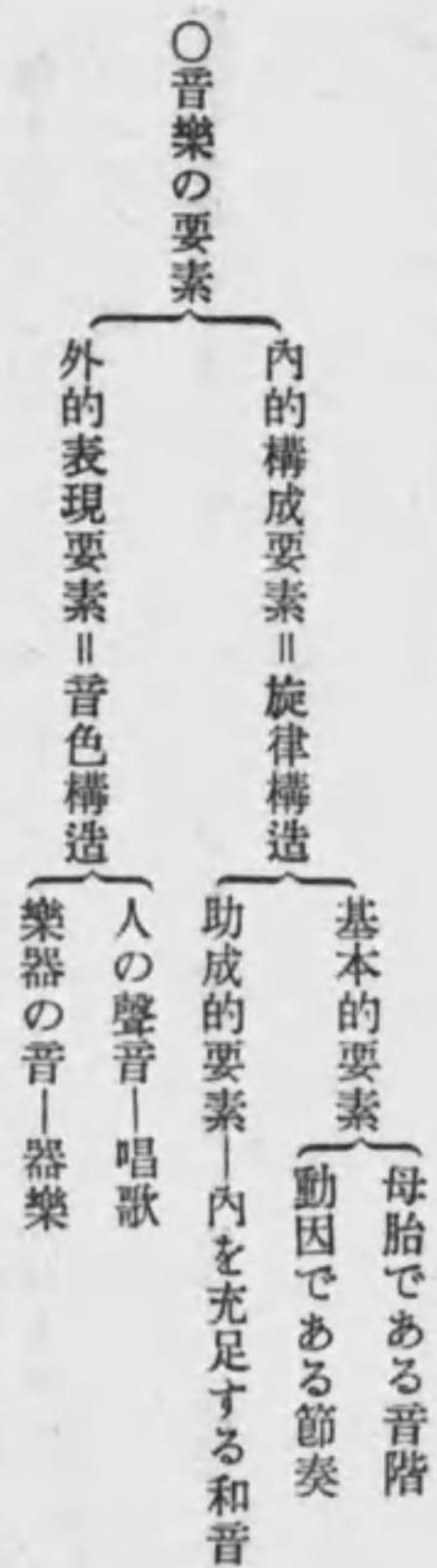
すでもなし。

第三には、節奏構造の問題である。これはまた、實に、不可思議な程、あいまいにされてゐるようである。一體、「旋律」と「節奏」と、言ふ風に二つならべて、考へ得るものであらうか。脈搏と血行と、など、誰が考へ得るであらう。即ち、旋律構造の中にこそ、常に、常に節奏が、活躍してゐるものである。節奏は、旋律の中に生きてこそ、はじめて、その節奏の節奏たる意義を全うし得るものである。

而して、最後に考へねばならないのは、旋律構造の性格に關してである。旋律構造の性格、これには、もとより、節奏も、大いに關係してゐるのであるが、最も根本的な要素は、旋律構造の母胎である、所謂、「旋律的に性格的な音階」である。この、「母胎であるところの性格的である音階」これが、基本となり、それに動因である節奏のはたらきが加はつて、こゝにはじめて、より性格的な「旋律構造」が発生するものである。

以上、稍、詳説せる點、在來の音樂理論は、全く、文字通りに、「無」なのである。如上の關係に於いて然るのみならず、一層、痛切に感ぜられるのは、音樂の主役である、旋律構造の理

論はもとより、この旋律構造の母胎である音階に關してさへ、確實なる理論がたてられてゐないのである。この點、西洋音樂の程度の程も、略察せられようと言はねばなるまい。次ぎに、音樂の構成要素表の私案をかゝげよう。



右の表によつて、明らかなる如く、音樂の構成要素中、最も重要にして根本的なものは、旋律構造中の基本的要素の中の、「母胎である音階」である事が、十分に首肯せられよう。

だから、この「母胎である音階」が、その本來の性質上「旋律的に性格を表現するによき母胎」なる特性の上に於いて、不完全である場合、これは、よき音階とはいひ得ない。

したがつて、斯かる、いかゞはしい母胎なる音階によつて構成せられたる音樂は、巧みなる

組織を有し、又如何に絶妙なる演奏法によつて、表現せられても、その中心に「まこと」なき言葉の如く、最上の音楽とは言ひ得ない。即ち、

○心に「誠心」なき生活、これは、未だ、靈長である人の生活とは、言ひ得ないし、

○眞實ならざる空言、即ち、空理、空論、これは未だ「言靈の顯現」とは言ひ得ない如く、

○性格の完からざる母胎、即ち音階によつて、構築せられたる音楽は、これ、我等の魂の精髓を表現する如き、到底不可能なるのみならず、魂の情趣を養ふべく、あまりにも「さかしらなる音楽」と言はねばならない。

繰返して切言する「音楽の中心的構成要素は、實に、實に、旋律の母胎である音階である」と。

◎西洋音楽の缺陷を悟れ

○先づその根據を究めよ

西洋音楽の根據は、さきに述べしが如く

一つには、楽音の原理にもとづく、その組織だちたる、偉大なる音楽構築であるし、

二つには、その組織だちたる音楽構造を、遺憾なく演奏し得る、樂器の發達であり、樂器の編成法であり、演奏技術の進歩卓越である。

この點、我が日本の音楽の如き、文字通りに、物の數にも入らない。これは、先にも言へりし如く、その原因は、偏へに、

一つには、爲政者の無教養にもとづく、無思慮によるものであり、

二つには、教育家の無識の致すところであり、

三つには、物質文化にのみひきずられてゐる、現代世相に壓倒せられ居る國民の不運なる結果でもあるし、

四つには、音樂關係者の、無氣力、無氣魄なるがためでもある。

これは、躍進日本國民の衷心より反省すべき、一つの、精神文化方面の大缺陷なのである。洋樂の、構成上の根據である、音樂構築に關し、今少しく、突込んで考究してみよう。これには、構成的に考へてみて、二つの方向が存在してゐる。

一つは、旋律と旋律とを組み合せてゆく、所謂「多旋律の構築」であつて、これは、對位法的構築と稱へられてゐるし、いま

一つは、「和音構築」なる、樂音の原理にもとづく樂音群に根據をおく多音構築であつて、これは、「和聲的構築」と言つて差支ない。

何れも、多音構築なる點に於いて、變りはないが、その理論的なる點では、「和聲的構築」の方が、勝つてゐる。しかも、近代ならびに、現代の西洋音樂は、この方面に、重點を置いてゐるのであるから、西洋音樂の、構成上の特色は、「和聲的多音構築」であると言はねばな

らない。

この、和聲的構築なるものは、その根據を、あくまでも、樂音の原理の上に置いてゐるものであつて、この點、所謂「日本の音樂家」は、もつとく、學問的に研究すべきである。

然らば、西洋音樂に於いては、吾人がさきに、表示したる音樂の構成要素間の内的關係が、如何になつてゐるのであらうか。この點、遺憾ながら、在來の理論には、旋律構築に關する眞の理論が缺如してゐるのであるが、幸か不幸か、西洋音樂に於いては、

○まづ、和音構築の原理を根據として、音階の主要特定音上に、それ／＼、和音構築をなし、
○次に、これを、無意味に、くづしならべる事によつて、旋律構築の母胎である音階を案出してゐる。

而して、この點、現在も、そのままに踏襲してゐるのである。だから、洋樂の内的構成要素の根據は、

一、樂音の原理にもとづく、和音構築を基礎とする多音構築と、

二、意味なしに、和音構築の原理の、理論的ならざる流用によつて、構成せらるゝが如く見

ゆる、旋律構造の母胎である音階、

この二つである。

而して、表現要素の方面では、この多音構造の特徴を、最も巧みに表現するに相應しく、まことによく、研究もされ、發達もし、組織もされ、且はまた、演奏技術の鍛錬にも、十分に努力してゐる次第であつて、この點は、全く敬服の外はない。

これは、特に、西洋人の、人類の精神文化の中核である、音楽文化に對する關心が、極めて高く而して深い結果による發達である事を、十分に了解せねばならない。

最近、我が國は、日獨、日伊の、兩防共協定を締結してゐる。これは、まことに結構な事であるが、我等は、尙ほ百歩を進めて、獨逸や、伊太利の、ほんとうの魂にふれ、又吾々日本人の魂にも、切實に觸れてもらはねばならない。これを果すには、どうしても、「精神文化」によらねばならない。その中でも、「中核である音楽文化」これによる接觸、これは、極めて意義ある効果をもたらし得るものであるが、残念な事には、現在の要路の諸君は到底之を利用する力はもとより、理解し得る頭もあるまい。現在の我が國情では

○獨逸や、伊太利の、ほんとうに、誇であり、魂であると思はれてゐる音楽に接して、なる程なる程と、うなづける、政治家や、外交官や、學者やそして權力家が、果して居るであらうか、又

○これが、我が大日本の誇であり、躍進日本の魂を、ほんとうに、織り込んである、われ／＼の立派な音楽であるから、どうぞ、衷心から、大いに味はつてもらいたいと、ベルリンなり、ローマなりに堂々と携へて行つて、聽かせ得るものが、あるだらうか。

これ等は、現在では、よしや、不可能であるにしても、今後に於いて大いに考へなければならぬと、深く、廣く、そして遠大に考察する偉大なる爲政者が是非あらはれてもらいたいのだ。

さきにも説いてあるように、人類はもとより、國家民族にとつて、中心的に大切なのは、「精神文化」の進展普及である。もとより

○維持するために必要である「經濟的文化」も

○守護し、普及せしめるために、必須缺くべからざる「軍備」も

共に、多々益々必要である。しかし、常に常に考へておかなければならない事は、

○維持すべき「精神文化」は、果してあるのか

○守護し、普及せしむべき「精神文化」は、ほんとうに、よく育ちつゝあるか。

○そうした「精神文化」がよく育つように、國策が實施されてゐるのか

これは、先とか後など考ふべき性質のものではない、常に常に、同時であらねばならない。だからこそ「非常時」なり「超非常時」なりの心構が、層一層必要なのである。

若し、眞に、躍進大日本の、眞の繁榮を、心から欣求せられるならば、要路の人々はもとより、一般國民も、とくと省察を要する大問題と確信する次第である。

○又その發達の跡は

西洋音樂の發達のあと、これは少しくわかり易く述べる丈でも容易ではない。特に、本書に於いては、性質上、ながくのべるわけにはゆかないから、極めて簡単に、要點丈に、タッチする事とする。したがつて、問題は、音階の發見、音階理論の構成、その變遷、而して、和音

構造の完成等に關してである。

音階の發見、これは、古代ギリシヤである。音樂に旋律があり、旋律には、その規矩となり、その母胎となるべき音階があると言ふ事を、古代に於いて、相當に考へてゐたのが、ギリシヤ人であつた。

而して、これの構成法を考へ出したのが、有名なるピタゴラスである。ピタゴラスは、一つの規準になる音階の形を本として、(理論的には構成原理とは見做しがたいが)七種の、全音階的音階をあみ出してゐる。これが、古代ギリシヤの、七種の、七聲音階と呼ばれてゐるものである。

次の時代は、ローマ法王の時代である。この暗黒時代とさへ難ぜられた程、宗教權力の盛大だつた時代は、總べては、煩錯なる形式に縛せられる事であつたらしい。音樂に於いても、ギリシヤの、七種の七聲音階を模範として、グレゴリー旋法なる、七種の音階を決定し、而して、嚴格なる規約のもとに、對位的なる、多音構造の作曲を、なさしめてゐたのである。しかし、音樂は、組織を要するのは、當然ではあるが、然りとて、決して、「組織はこれ音樂なり」で

はない。そのために、作曲法徒らに煩錯に流れて、よき作品は生れ得なかつたのである。

斯くしてゐる中に、ルネッサンスの氣運に覺醒せしめられたる民衆が、盛んに、自らの歌謡、自らの舞曲を奏で出したものである。「ミンネ・ゼンゲル」とか「マイステル・ゼンゲル」などの、各種の旅音楽師の團體が、盛んに活躍したのは、この頃の事である。ワグネルの歌劇の題材となつてゐる「歌盗人」や「タンホイゼル」等は、すべて當時の有様を物語つてゐるのである。

斯かる機運の醸成と、激刺たる民間の音楽運動とは、遂に、ギリシヤや、ローマの、音階は、徒らに、空理の上にたつものとして排除せられ、こゝに

○現在の長音階形の音階と

○現在の短音階形の音階と

この二つのみが、好尚に適せる音階と決定するやうになり、とう／＼他の方面の發達も相關係して、西洋音楽の一の大高峰である。ヨハン・セバスチアン・バッハの、この兩音階にもとづく、殆んど完全に近い、對位法的作曲の出現となつたのである。

バッハ以後は、古代のオルガヌムなる、四度、五度の、重疊的多音様式に、民間音楽による三度や六度音の混入によつて、はじめて、現在使用せられてゐるような、所謂「三和音法」が工夫せられたのである。

この、三和音法の完成は、バッハ以後の西洋音楽をして、全く、天馬空を駈けゆくが如き發達をなさしめたのである。現在、日本に知られてゐる作家の殆んどが、バッハ以後の人々のみであるのを見ても、その影響の偉大さが了解せられよう。

而して、結局、長音階は、三個の長三和音をくづしたものであり、短音階は、三個の短三和音をくづす事によつて構成せられるものであるとの、不言不語の間に、確信的慣習が行はれつゝ今日に及んだのである。

而して、その和音構成の理論は、樂音の原理より見て、まことに、正しいものであり、堂々たるものではあるが、

○旋律構造の母胎である音階の眞の構成原理

○旋律構造と、和音構造との眞の内的關係。

これ等に關しては、未だ、確たる理論も、慣習も、行はれてゐない、これが、洋樂の現状である。

斯くて、最近に於いて、起つた、二つの運動がある。

一つは、歐洲に起つた音樂運動であつて、所謂「無調性音樂」なる一名未來派と呼ばれるものであつて、新たな和音感の表現を求めてゐるものであるし、今

一つは、「ジャズ音樂」である。これは、「リズム」と、「音色の珍らしさ」に基礎をおくものであるが、

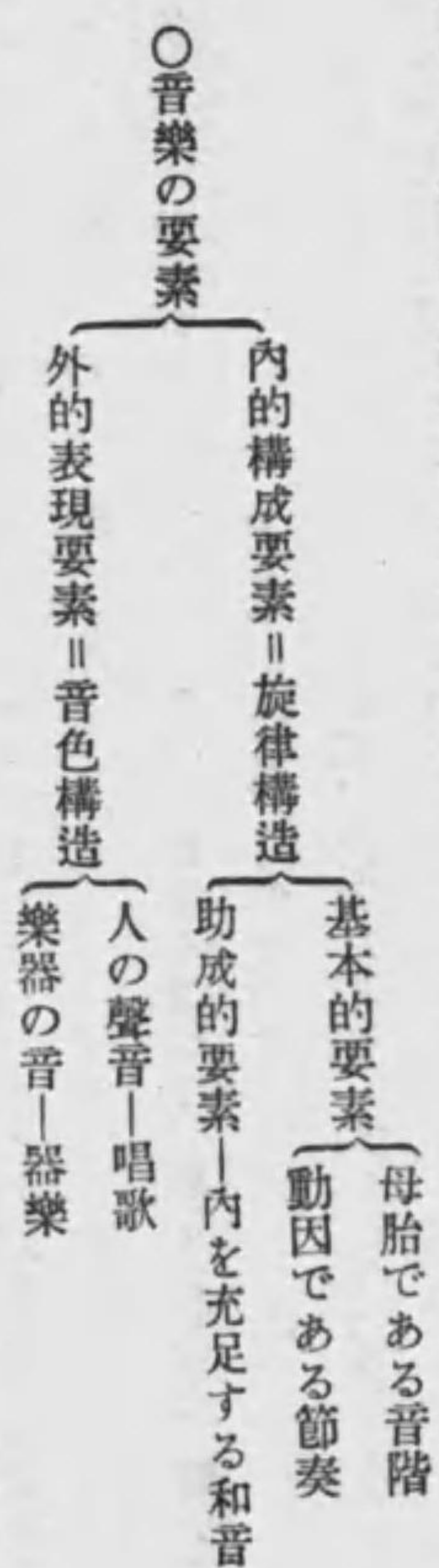
共に、在來の、三和音一點張りの西洋音樂に對する歐洲人、米國人のあきたらざる心のあらはれと見て差支ない。

○而して致命的缺陷は

吾人は、僅かばかり、西洋音樂に關し、その特徴とする處と、その發達のおとくに關して、説述したのであるが、こゝに於いて、吾人の中心論點である。洋樂に満足する能はざる原因、

即ち、西洋音樂の致命的缺陷に關して、十分なる省察を試みよう。

吾人は、さきに、まごころ、これは、人の生活の中心であり、眞言、これは、言葉の生活の眞底であり、性格表現に適したる音階、これは、よき音樂の中核をなすものである事を、述べてある。まづ、音樂の構成要素表を今一度かゝげやう。



この構成表を、仔細に研究し、且は、西洋音樂の根據なり、卓越せる點を調査してみると、西洋音樂の缺陷は、「旋律構造」の「母胎である音階」にある事が、了解せられよう。

一體、音樂は、吾人の何を表現するものであらうか、吾人は、この點、さきに明らかに説き示してある。即ち、音樂は、吾等の情趣、換言すると、我等の魂の性格を表現するものである。

樂音によつて、我等の心もちを表現する、これが音樂なのである。意味丈の表現、これは、言葉である。「言靈の精の精」の表はるところ、つまり「言葉のつくるところ」これ音樂の生るゝ處なのである。

而して、音樂の特徴を、最も明瞭に表はすものは、これ、旋律である。吾人がさきに、「旋律あらはれて、音樂はじめて生る」と、言つたのは、この意味に於いてである。
この點に關し、少しく述べよう。

第一、一つの音が、しづかに、しづかに澄み渡つて、殷々として、響いてゆく、このときにも、吾等は、たすかに、心をひかれる。その音の性質さまざまに、これは、和音の場合に於いても同様である。これは吾人が山なり、大岩なりを、ずつと見つめてゐるのにとへ得よう。これは、決して、無の感じではないが、きはめて、靜寂なる有の感である。

第二に、連続せる、一音、つまり、リズムにのせられたる一音の連續をきく。おやしろの太鼓のひびき、お寺の木魚のひびき、豆腐屋の鈴や、新聞屋の鈴、こゝにも、ある感じがはたらく、草木をみるような感じが、つまり、單なる有の感丈ではなく、生きてゐるなあの感が伴

ふようである。

第三に、旋律となると、音の存在はもとより、節奏の伴ふのも當然、より正確なる顯現となるから、こゝでは、もつとく感じが進んで、性格があらはれてくる。つまり、ほんとうの氣持の表現がなされるのである。即ち、旋律あらはれて、はじめて音樂が生るのである。さきの説明と、まるで別の方向からも、この事が言ひ得る。而して、これを生物に譬へて見ると、はるかに動物的であると言へよう。

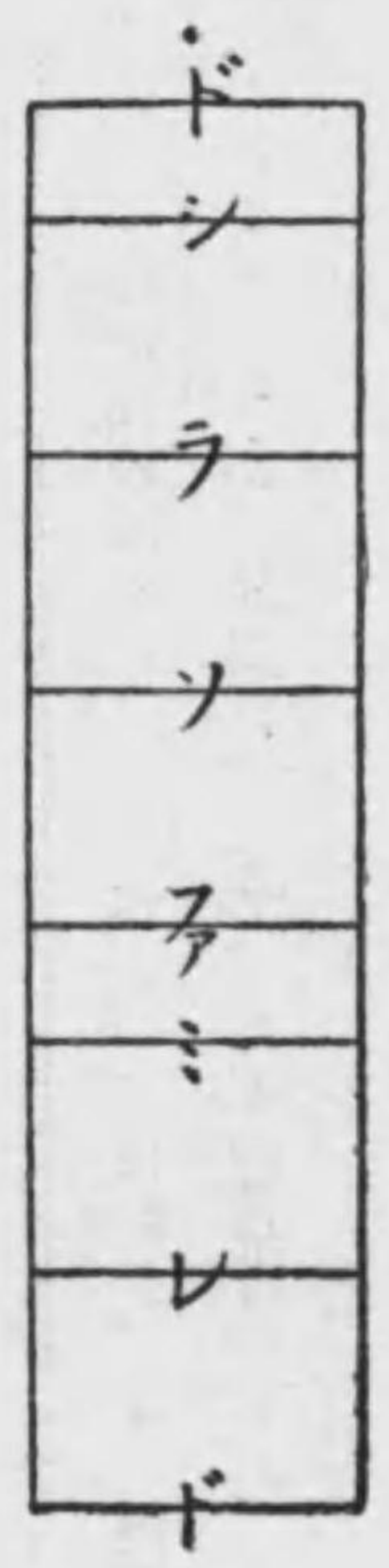
仔細に觀ずると、一山、一岩はもとより、一塊の土、一握の砂にも、我等は或る性格を感じ得る。まして、生長して、そして枯れて行く植物のそれ々に、或るこまやかなる性格を感じ得る事は當然であるが、しかも、喜怒哀樂を表現し、飢渴を訴へる動物に對する程ではない筈である。動物は、全くはつきりその性格をあらはしてゐる。旋律の發生は、動物の如くにその性格、即ち魂の情趣があらはれるものである。而して、より適確なる意味、そこにはじめて、「言靈の精の精」のあらはれに至るものである。この點、ベートーヴェンの、第九シンフォニーにつき深く考へて見る事が必要であらう。



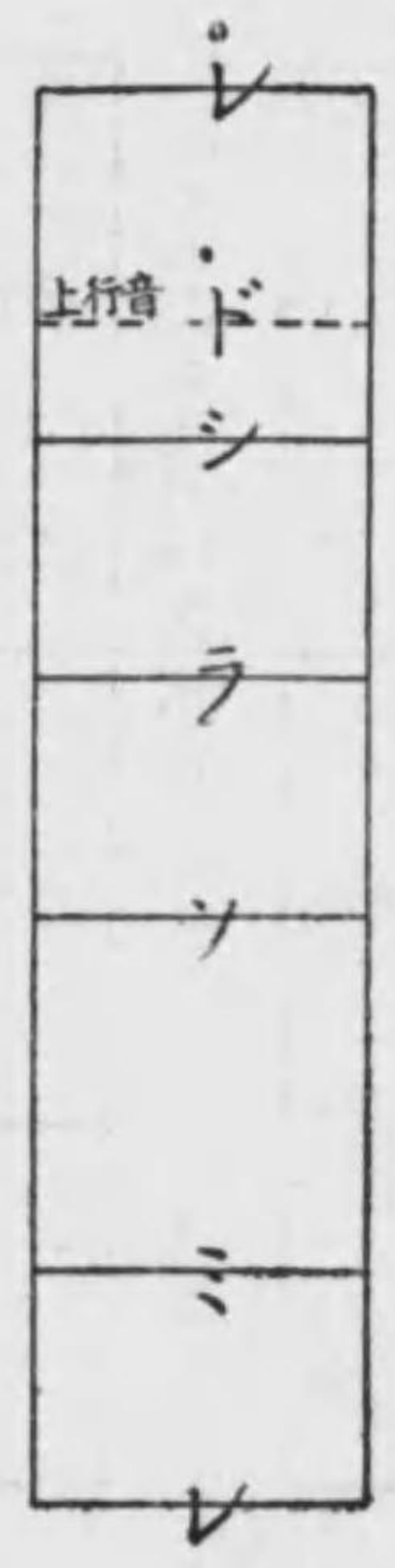
兎に角、音楽の中では、旋律構造が、最も大切なのである。而して、構成表に明らかに示してあるようにこの旋律構造に於いては、「母胎である音階」これが、最も重要な意義を有してゐる。この「母胎である音階」この最も重要な要素に於いて、西洋音楽は非常なる、缺陷を示してゐる。

第一、西洋音楽の母胎である、音階は、音楽の生命とも言ふべき、性格を表現する上に於いて、あまりに機械的である。次に比較して見よう。

○西洋の長音階

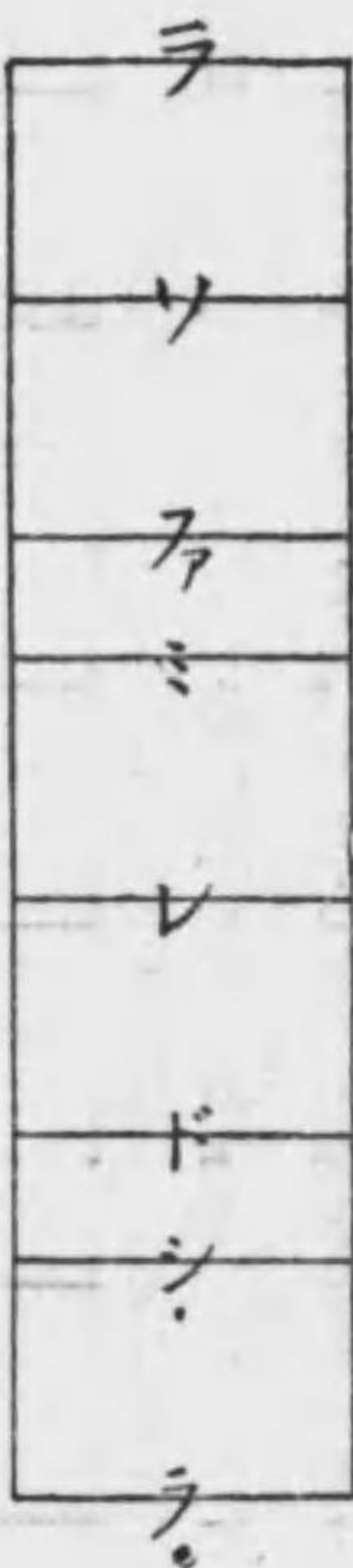


○日本の全音性基本音階

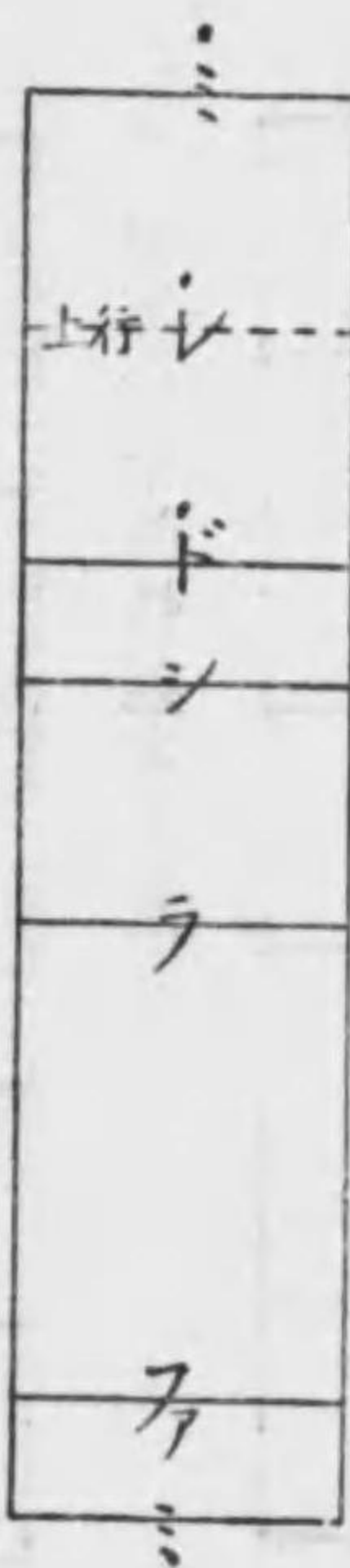


同一音を基音として、そのままの姿に於いて、双方を、しづかに、しづかに、上行下行何回も、ピアノにて演奏してみるがよい。どちらが、「高雅なる」即ち、男性的なる情趣を多く表現し得るだらう。而して次に、

○西洋の短音階基本形



○日本の半音性基本音階



この二つを、前と同様に比較演奏してみるがよい。何れが、より優雅なる、即ち女性的なる性格を表現してゐるであらうか。結果は、當然、日本の音階の方が、はるかにすぐれてゐるのである。

高雅なる情趣に於いては、日本の全音性の音階の方が、而して、優雅なる情趣に對しては、

日本の半音性の音階の方が、相共に、はるかに、卓越してゐる。

即ち、西洋の、長音階と短音階とは、性格を表現すべき旋律の母胎として、日本の音階よりもはるかに、非性格的である。これは音楽表現に於いては、最も致命的なる大缺陷なのである。音楽の眞の姿は、單なる器械的なるなぐさみではない。あくまでも、人の心を表はすものである。その魂の最深の情趣、即ち、きもちを、表現するものである。だから、例へてみると。

○音色は、人間の容色なり風采の如きものである。

○音楽構築は、人間の身體の如きものである。

○旋律は、人間の氣持に髣髴たるものである。

人間にとつて、我等はその何れを第一位におくか、これは誰しも、あやまたざる處である。音楽に於いても亦、當然の事と言はねばならない。

次の缺陷は、この旋律構造の母胎である音階の構成方法が、和音の構成原理によつて、束縛せられてゐる事である。さうした方法によると、偶然に一致するからと言ふ如き、旋律的には理論的ならざる原理を以て、如何にも、構成原理であるとする如き、誠に「不可解」など申さ

ねばならない。

西洋音楽の第二の缺陷は、この點である。したがつて、西洋音楽に於いては、旋律と和音との關係が、ともすると、位置が顛倒されて、和音にしばられてゐる旋律が、至るところに出現してゐる（尤も嚴密に言ふと、和音理論も大いに検討を要するのであるが、）一體、脇役は、主役を助けてこそ、即ち、主も脇も共にそれぞれの立場のもとに全うしてこそ、よき旋律構造となるものであるのに、あまりに、和音に捉はれる結果、主人役である旋律の情趣が、兎角、ないがしろにせられて、譯のわからない音楽とさへなるのである。

○和音の、より新しい感性を求めようとして生れたる無調性音楽

○素朴なる旋律を、感覺的に珍奇なる音色によつて表現しようとするジャズ音楽

この二つともが、洋樂の有する、旋律の根本的なる致命的缺陷に對して、反動的に生れ出でたるものでないと、果して言ひ得るであらうか。

要するに、西洋音楽の致命的缺陷は、實に、實に、その旋律の母胎である音階の、甚だしく不完全なる點なのである。

◎日本人よ自らを知れ

○我等の現在を視よ

目覺めつゝあるアジアの盟主たる、我等の皇國大日本。

眞實の世界平和の促進者であり擁護者であるべき、我等の祖國日本の本の現勢は如何に。

畏こくも、誠に忝なくも有難き、大皇統を仰ぎ奉り、御教さながらに、人類正義の榮光を實現せんとの大道をいそしみゆく、我が大國是、

その素質に於いて、その歴史に於いて、寔に、萬邦無比なる、我が、大皇國の現姿。

三千年の年月を、極東の滄波の中に、東洋の文明を、刺戟とし、糧として、おのづから、成育したる、我が日の本の現在。

僅々七十年の短日月の間に、我等現在見るが如くに發育し、榮えゆきける、我が大日本。

而して、この有難き我等の祖國大日本の、眞の大道顯現の上に、いみじくも、大いなる効果をもたらすべき、「精神文化の中核なる音楽文化」、その現状は果して如何に、

私は、さきに、「維持すべき文化ありや」と質問してゐる。私の自答は、

○眞實によく成育したるもの、未だこれ無し。然れども

○今後大いに育成して大成し得る、本質的に、素質よきもの、我にのみあるなり、と、但し、不幸にして、

○我が國民、未だその、寔によきものある事を自覺してゐない。したがつて

○我等の音楽文化は、大いに育つべくして、未だ、その發育を開始してゐない。

しかし、私は、心しづかに、我が日本人の、音楽、乃至は、音樂的生活を、觀じよう。

文化的に、育つてゐるとか、發達してゐるとかを問はないならば、その素材に於いて、而して分野に於いて、随分豊かであつて、富めるものと言はねばなるまい。浪花節、義太夫、詩吟、琵琶歌、長唄、各種の古謡や、俗謡や、民謡や、流行歌。三絃樂や、箏曲や、吹管樂等の器樂特殊の立場に立ち特殊の形式を有してゐる、雅樂の合奏や、囃子入りの謡曲、斯くならべてみ

ると、

○所謂語り物に於いて、又

○純歌謡類に於いても、而して又

○器樂や、器樂合奏の類に於いても

その素材の種類、分野等、決して少なくないのみか、考へようによつては、はるかに多量であると思はれる。中世紀頃までの西洋音楽や、現代の支那や印度の音楽生活と比較してみることがよい。

この事は、我が國民が、精神文化の中核である音楽文化に關して、決して、西洋人に劣るものではなく、却而、はるかに、よい素質を有してゐる事を示してゐる證といひ得よう。

但し、文化的に見られると、誠に、はづかしい程、未發達である。この點、伊澤修二先生の如き先輩が萬難を排して、國樂の眞の振興のために、西洋音楽を取り入れられてから、既に六十年の歳月を経てゐるが、未だ、その機運には、至らないと見える。

一體、總べての文化は、擁護せられ、奨励せられる事によつて、よりよく發達するものであ

る。

○我が國軍のよく、發達してゐる事。

○醫學や醫術の比較的に發達してゐる事。

○交通機關の發達してゐる狀況。

○産業の比較的發達してゐる方面。

これらの總ては、國家の保護と獎勵とが、宜しきを得たるが爲に、大いに、發達興隆したのである。

而して、精神文化にあつては、特に、特に、其の保護と獎勵とが、必要とせられるものである。何故ならば、所謂物質文化は、その發達の結果である處の、「經濟的效果」を、直ちに獲得し得るが故に、多くの人々が、よく關心を持ち易しいのに對し、精神文化の方面は、實は、人生の根本なのであるに關らず、その結果が、急速には、現はれないが如くに感じられる爲に兎角等閑に附され易い。

現に、我が國に於いて、如何なる方面が比較的劣つてゐるだらうか。

○國民育成の根本である教育。

○精神文化の中核である藝術。

○文化躍進の根源である學術。

教育、藝術、學術、これ等の劣つてゐると言ふ事は、結局、「教育精神」が駄目なのであり、「藝術精神」が躍動してゐないのであり、「窮學精神」が眠つてゐる事なのである。斯くして國家なり、民族なりが、眞實に、繁榮し得るだらうか、まして、眞の意味での大道が實現し得るであらうか。

之れは、さきに述べたように、凡人には、兎角、等閑に附され易い性質を有するからではあるが、若し、眞の繁榮を希ふならば、必ず、こゝに目覺めなければならぬ。大木や、そして美果を求むる事にのみ捉はれて、その根幹の培養を怠るゝ如き、これ、決して、眞に國を思ふの人とは言ひ得ない。

特に、音楽文化に於いては、まことに、慘たる有様である。しかも我等は、その才能に於いて、大いに勝れて居り、素質に於いて、根本的に良きものを保持してゐるのである。之を、大

いに擁護し、之を大いに奨励しさへすれば、必ず、大日本の魂さながらなる、大日本の國樂が必ず生れ得るのである。

○而して我等の祖先を想へ

護國精神の切實深刻にして、その實の絶大なる事、これまことに、偉大なる國家の、最も尊重すべき點である。

富國精神さかんにして、國民、これよくつとめ、これよく働く事、これまたまことに有難き、國の至寶である。而して

學問技術に於いて、眞に深く廣く研究し、自國のみならず、外つ國人にまで、眞理を傳悟せしめ、生活の向上を企及せしむる事、これ、より積極的なる、偉大なる國家の重要事業であり、進んで

藝術の世界に於いて、最も深刻切實にして、卓越せる、數多の藝術を創造し、自國民の魂を養ひ、自國民の眞の團結をはかるはもとより、世界萬邦の人々に、心の憩や、魂の喜びを與へ、

而して、「波風たゞぬ四方の海」の建設に資する事、これ、實に、實に、偉大なる國家と偉大なる民族にとり、最も關心し、最も努むべき、重大なる道なのである。

而して、その中、特に、音樂文化は、有効なる特色を有してゐる。何故ならば、音樂は、直接に、その魂の情趣を表現してゐるからである。即ち、言葉の如く、通譯を必要としないからである。魂↓音樂↓魂、であるからである。

現在の我が國民が、音樂的才能に於いて、その所有してゐる素材に於いて、決して他國人に劣つてゐない事は、さきに述べてある。而して、吾等の祖先は、如何であつたであらう。

先づ、記紀にある。多くの「詠み」の表現は、何を意味してゐるのだらう。また、あの、歌の寶庫である萬葉集は、而して、その後をついだ、古今集や、次ぎ次ぎにあらはれた、多くの勅選和歌集は、

聖德太子様は、支那や、朝鮮や、印度からの音樂を取り入れられて、日本にも、音樂の興隆を圖らうとせられたが、學習者が、あまりに老人ばかりの爲めに、所期の目的を遂げられなかつたようではあるが、しかし王朝時代の、大宮人達の、管絃のすさびは、相當だつたものよ

うに推察される。その極めて小さな形が残つて、現在の雅樂となつたのである。然かも、決して、唐様や、韓様その儘でなく、十分に、日本化してゐるのである。これは、朝鮮の雅樂を研究すると、明らかに了解せられるのである。

その後、王朝末期の、白拍子等の舞樂や、武家時代に入つてからの、猿樂や、田樂、下つて謡曲、而して語り物としての、軍記語りや、琵琶歌の發達。

斯くて、徳川時代に入ると、三絃樂や、箏曲や、尺八音樂、それに、各種の所謂、古謡や俗謡が、大いに勃興してゐる。

現在の邦樂と言ふのは、大體「雅樂」と「謡曲」と「俗樂」の三部分であから、これは、すべて過去の傳統と言つて差支ない。

これらは、吾が國民が、古來から、その素質に於いて、音樂的にも非常に卓越してゐた事の證である。

尤も、音樂に關する限り、或る國民が、音樂的であつて、ある國民が、非音樂的であるなどと言ふ事は、全然あり得ない。たゞ、特に、卓越してゐるか否かの點になつと、これは、詳細

に調査せねばならない。但し、我が國民は、音樂的素質に於いて、大に勝れてゐる國民である事は、祖先の業蹟を想ふ事によつても、十分に悟得せられよう。

○何故に大いに自覺せざる

眞實の科學の進歩、これは、大いに歓迎すべき事である。しかし、似て非なる、科學に壓倒されたる人生なぞば、寔に、惨めなものである。

音樂の方面で例を引くならば、近來は、ラヂオ、レコード、トーキー。誠に、素晴らしい發達をしたものである。聴く事丈で満足してゐるならば（私は、かゝる人を音樂的有閑階級の人として排斥する）常に、どこでも満足し得られるようである。しかし、ほんとうの音樂生活は、自らが演奏する事だ。とくに、歌ふ事だ。自ら歌へるものを、育てられざる爲に歌へないで聴く丈でいゝと思ふ者は、一種の不具者なのである。

一體、現代は、世界自體が、人間が生活の便宜のために、生活の向上のために、案出せられたるものに、壓倒せられてゐるようだ。即ち、「物質文化」に壓倒せられたる、生きて甲斐な

き、誠に、なさけない人生、この意味に於いては、

○世界無比に廣大なる領土を有する大英國も

○世界の富を一人でかき集めてゐる米國も

○共産政治と叫びつて威張つてゐるロシアも

○惨たる姿で居る支那はもとより

○この、尊き我が日本も、もつと、もつと、ほんとうに自覺しないと、この仲間入りをする事になる。

人間の生命の目標である眞理體現、即ち「精神文化」その中核である「音楽文化」この點に關し、ほんとうの、自覺と、自信をもつ事を、要路の人々はもとより、一億の日本人に、私は心から要請する。而して、これがためには、少しく、眞の音楽と人生の關係を考究せねばならない。

吾等人類生存の意義は、實に、大宇宙の大道を、完全に、體現する事に存する。即ち、眞理體現こそは、實に、吾等人類が、萬物の靈長として、或は神の嫡子として、この世に生を享く

るの意義を完ふする所以である。

思ふに、所謂、

○物は、物として

○植物は、植物として、又

○動物は、動物として

總べて、それ／＼の意味に於いて、それ／＼に、眞理を顯現せざるはない。而して、特に、吾等人類に於いては、この宇宙の大眞理を、與へられたる吾等の能力さながらに、

○眞に知解會得し……………知

○深く感悟銘憶し……………感

○直く哲觀窮行し……………行

○篤く渴仰確信し……………信

斯くて、各その純眞の姿に於いて、おのがじし、衆多と共に、與へられたる生に殉じ、與へられたる生を完ふすること、そこに、靈長としての、生の價値が完成せられる筈である。

而して、我等大日本帝國臣民は、至幸、至福である。たゞひたむきに、大中心であらせられます。上御一人の、御旨ながらに、いそしみ、かしくむ事によつて、この大道を、果し得るのである。何故ならば、上御一人の御心こそ、而して、大皇道こそは、この宇宙の大道であるからである。この事は、日本人として、日の本のほんとうの古典である古事記を、常に深く心讀する事によつて、悟得し得る筈である。

我が、大皇國は、今や、眞の大皇道の實現のために、大躍進途上の、大非常時に際會してゐる。而して、これを完全に乗り切るには、まづ、内にあつては、

○眞實に個性にもとづける最大能力による奉仕。

○純情に基づく、共通性による完全なる大和樂。

斯かる境地に於ける、國民總體の、眞の一致團結であるし、外にあつては、

○敬まはれると共に、心から懐かしまれる。

○信頼せられると共に、よき範とせられる。

斯くの如き我が國民の、多數の海外發展に俟つべきである、而して、

○内に於ける斯くの如き大團結。

○外に於ける斯くの如き大發展。

これこそは、我が大皇國の眞の大道であつて、獨り我等一億の日本國民の幸福の基調であるばかりでなく、二十億人類の幸福なる生活の源泉となるものである。而して、これが、達成こそ、私の絶えず口にする、精神文化の大發達、即ち、教育、學術、藝術の、大發達が、常に最も切實に必要なのである。特に音樂文化に於いては、

○音樂は、眞の音樂は、常に、純情の表現であるが故に、人の純情の啓沃には、純眞なる音樂程有効なものあり得ない。次に、

○音樂は、萬物協和の理法によつて、和樂の基調となり、根元となるものである。この意味に於いて、眞によき音樂の發達普及は、人生の和樂の上に、はかり知られぬ効果をもたらすものである。

故に音樂は、わが、大皇國々民の眞の幸福、眞の大發展に、極めて重要な効果をもたらし得るものである我等は、先づ、この點に關し、徹底的に自覺せねばならぬ。

而して次には、我等の保有する音楽的才能に關してである、私は、我等の現在我等の祖先に關し、少しく、述べてある。その何れに於いても、卓越すべき才能を有してゐるし、しかも、本質的に、最も勝れてゐる素材を有してゐるのである。不幸にして現在は、目かくしされたる囚人の如く、自らを見得ないのである。つまり、あまりに、物質文化に眩惑されてゐるがために。私は言はふ、まづ、自ら、自らの目かくしを取り去れと。

◎我に絶妙の旋律あり

○我が情趣表現の母胎を見よ

我等は、常に、宇宙の絶対眞理を明確に知ると共に、之を確信せねばならない。すべてのものは、即眞理の姿もて顯現するからである。

物質や、植物や、動物は、それぞれの姿に於いて、當然眞理を顯現してゐるのであるが、我等の如く、その理法を自覺しその理法によつて、生活を自覺的に顯現し得ないのである。

而して、理法の自覺は我等の、勝手なる意志によつて成立するものではない。何故ならば、眞實の眞理は、常に、眞實の眞理其のもの、即ち、只一つだからである。

理法の發見、これは、理法が存在するからである。而して、常に、事實を對稱として、研究し、省察し、斯くして、會得する。これ理法である。かの、文藝復興期以後の物質文化方面の

發明と發見とは、まことに驚くべきものがあるが、これらの總ては存在する事實を通過せぬものはない。

音樂原理に於いても、又、然りと言はねばならない。事實があつて、これをよすがに、理論が発生してゐるものである。但し、他の理論に於いて、然かあるように、或る人の打ち立てたる理論、必ずしも、眞理ならざる場合のある事、これは、音樂原理に於いても、亦、やむを得ない次第である。

音樂の基礎は、旋律構造であり、この旋律構造の母胎は、實に音階である事は、上來繰返し、繰返し説述してある。であるから、音階は、實に、音樂の根本的要素といつて差支ない。

而して、世界にあらはれたる、所謂音階は、大體、次の四種である。即ち、

○古代ギリシヤの基礎的七聲音階

○支那の基礎的七聲音階

○和聲的音階

○日本の音階群

これらは、この樂音の原理よりの検討はしばらくおき、斯く、決定せられたと言ふ事は、かかる形態を歸納すべき事實が存在してゐたからである。即ち

○はじめに、旋律あり。而して、

○次に、この母胎である音階が発見せられるのである。

したがつて、眞の樂音の原理より見て、不完全なる音階である事は、

○實在する旋律が、不完全であり、そのために

○より深い研究をなし得ないための不完全なる形式の決定となつたと言つて、差支ない。

若し、支那の音階や、ギリシヤの音階が、不完全であるならば、これは、支那や、ギリシヤの實在のメロデーが不完全なのであり、和聲的音階が不完全であると言ふ事は、この原因をなしてゐる、旋律が、不完全なるためと言はねばならない。次に、實例を示さう。

ド	主音
シ	導音
ラ	下中音
ソ	屬音
ファ	下屬音
ミ	中音
レ	上主音
ド	主音

○和聲的音階の長音階

この兩音階共、變形多けれ共、意味なき展開なるが故に、これを省略する。

レ	ラ
ド	ソ
シ	ラ
ラ	ミ
ソ	レ
ファ	ド
ミ	シ
レ	ラ

○ローマの基礎七聲音階

ミ	最高音
レ	次高音
ド	第三音
シ	次中音
ラ	最中音
ソ	示指音
ファ	次低音
ミ	最低音

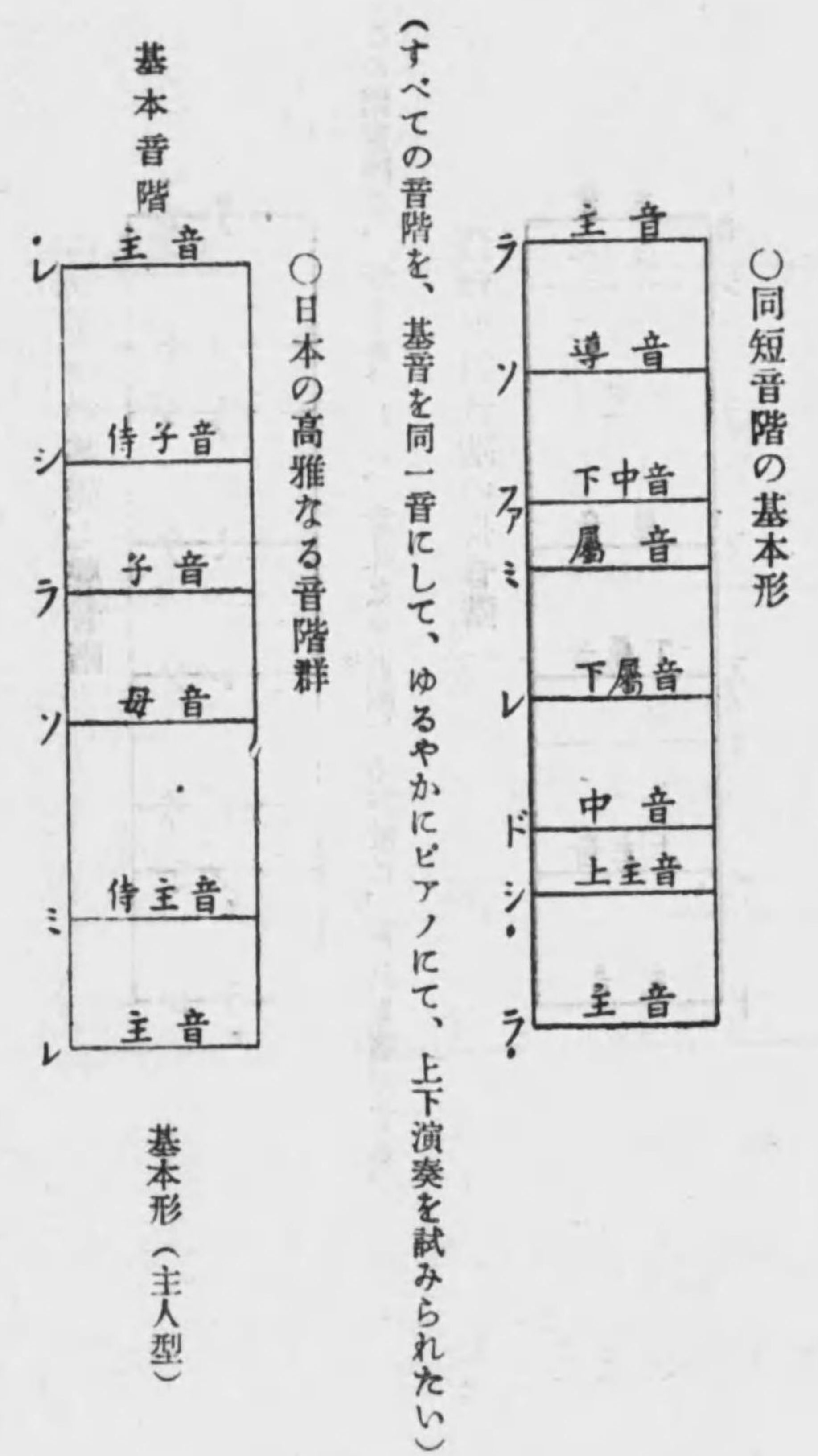
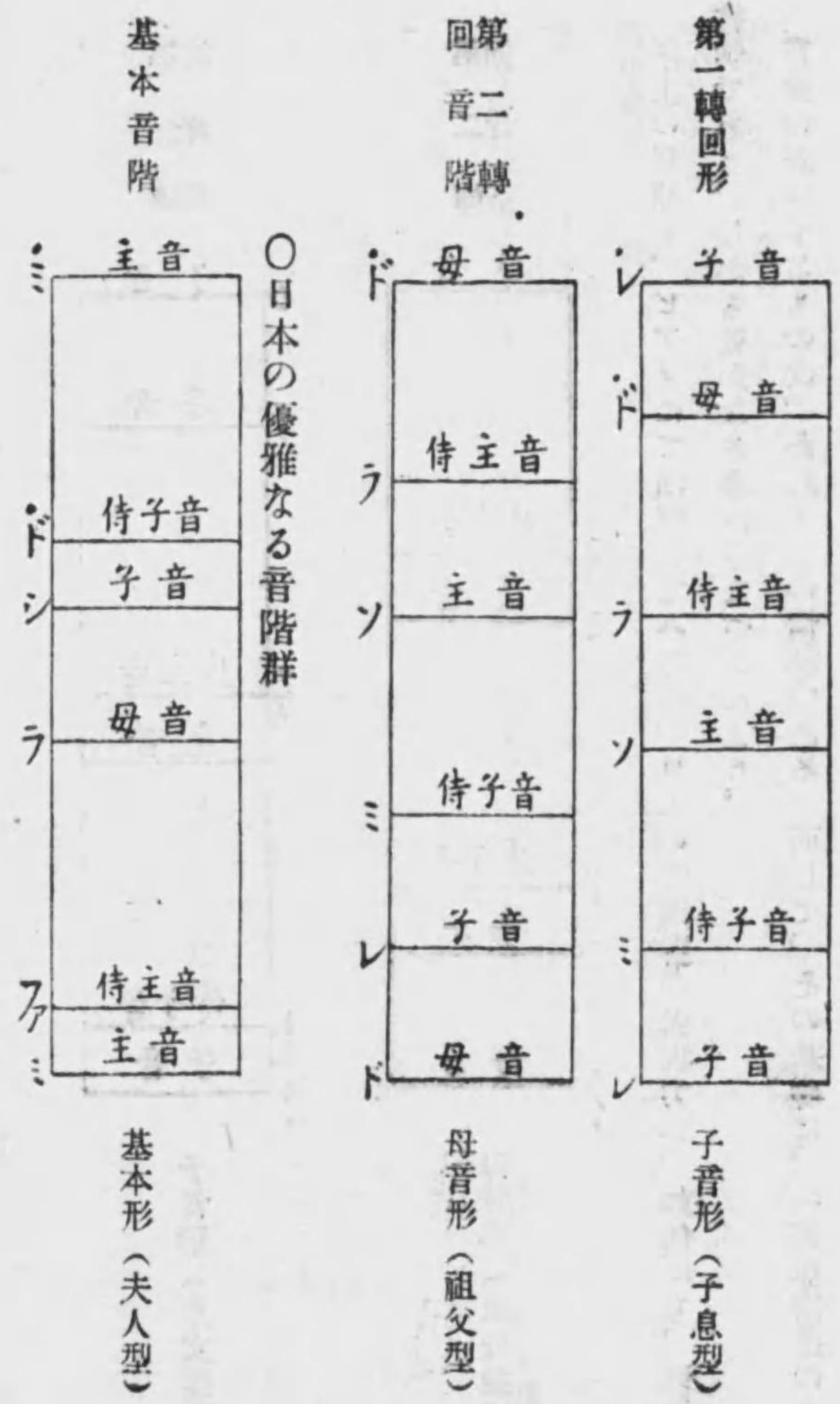
○希臘の基本七聲音階

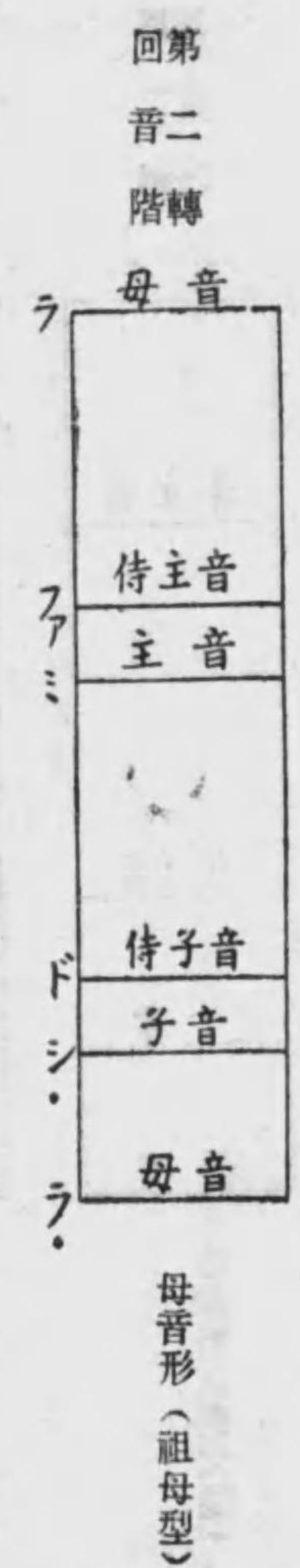
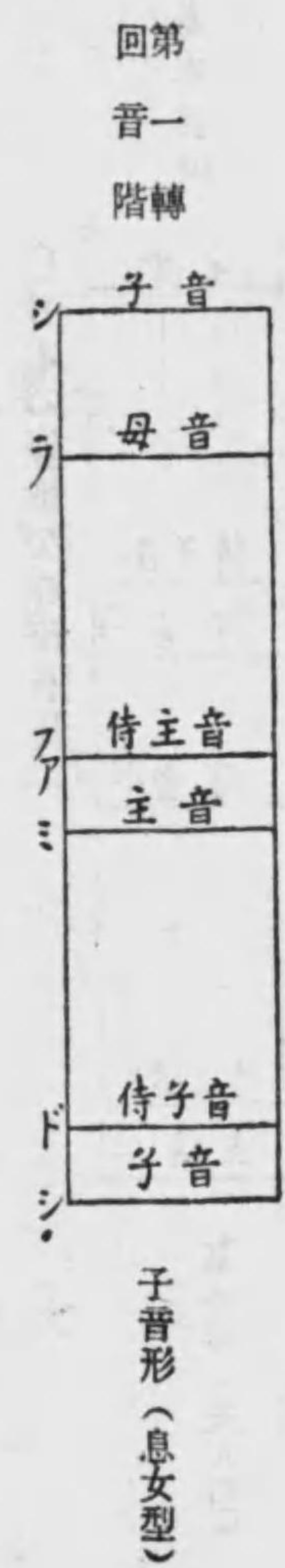
ド	宮
シ	變宮
ラ	羽
ソ	徵
ファ	變徵
ミ	角
レ	商
ド	宮

○支那の標準七聲音階

ド	宮
ラ	羽
ソ	徵
ミ	角
レ	商
ド	宮

○支那の基本五聲音階





以上の形態を、ピアノにて演奏してみると、日本の音階群の表現力が、如何にも、性格的に適切であり、しかも豊かな事がうなづかれよう。

音楽の表現するものは、われ／＼の情趣である。而して、その基礎は、「旋律構造の母胎で

ある音階」である。然るに、我が日本に於いては、従来は、知り得なかつたのであるが、これ丈の音階群が、嚴として存在してゐる事が、明證せられたのである。これ實に、我が日本の本の旋律構造の實體が、東洋の他の國とはもとより、西洋の諸國に比して、はるかに卓越してゐる事の證であると言つて差支ない。

とに角、最も性格的である、陰陽三世相さながらの音階群が、我が日本にのみあり得たと言ふ事は誠に有難き極みである。

○日本の音階の家族群



○不完全極まる在來の理論

事實と理論、これは、文化の發達の上に缺如すべからざる、車の兩輪である。吾々の能力に於いては、

○事實に對しては、感覺性が

○理法に對しては、法則性が

この、感覺性と法則性の躍動によつて、人類文化の建設が行はれてゐるものである。この事は、すべての文化の發達のあとをみれば、常に、常に、明らかな事實である。宗教觀に於いてさへ言ひ得る事である。即ち、「煩惱即菩提」とか「色即是空」等の言があるが、

○煩惱と菩提、又は、色と空、これは、感覺性にうつる、精神的事實であつて、

○煩惱即菩提、色即是空と觀する事は、これ法則性によつて觀じられる宗教的信念である。

故に、事實と理法、換言すれば、感覺性と法則性、この相互の發達は、極めて重要なものであるにかゝらず、我が日本の學者や、指導階級の人々は、特に、感覺性に對する認識が極め

て不足してゐる。したがつて、この感覺性の啓沃に關しては、殆んど意を須ひてゐない有様である。その結果、眞の文化の先驅者である筈の、各方面の、天才なり、名匠なり、巨人なりが輩出し得ない。いつまでも、過去の理法に束縛せられたる(しかも感覺は育つてゐないまゝで)ドングリばかりウヨウヨして、徒らに、鶴舌を以て、事を處してゐる姿、これが現状ではあるまいか。しかし、眞實の生活には、常に、感覺性と法則性が、如何にしても難れ難い關係、即ち表裏の關係を表してゐるものである。

○顯々たる實體、即ち事實は眞の感覺性により

○玄々たる理法、即ち法則は、眞の法則性により

この兩者の完全なる躍動によつて、はじめて靈長の生活、即ち、眞實の文化が建設せられるものである。これは、十分に考へねばならない事である。とくに現在の大日本國民に於て。

音樂に於いても、その通りである。中には、不勉強なる音樂家があつて、理論なんか不要だ、自分の感じ丈でゆけばよいなどと、まことに、困つた、「小天才」で済まし込む人もあるようだが、これは、到底、くみすべからざる音樂家と言はねばならない。

一體、所謂日本音楽、即ち、邦楽が、何故發達しないのだらうか。それは、全然理論をもつてゐないからなのである。

○自らの旋律の母胎は何であるか、而して、その母胎である音階の構成原理は、而して又、構成原理を産み出す、楽音のほんとうの原理は。

○節奏に於いてはどうか。目下も、相變らず、足利風の節奏や、徳川風の節奏のみである、（保存音楽はそれでいゝだらうが）なども、原理がないからである。

○曲の構成法、即ち、樂式の問題や、楽音構築の關係。

○音色の組合せ問題や、日本語のほんとうの歌ひ方等。

どこを見ても、理論的に研究してゐるあとがちつともない。これでは、あんまさんの道中と同じ事で、ちよんまげ時代の音楽はそれでいゝかも知れないが、躍進大日本帝國の音楽を創造するわけには參るまい。西洋音楽の發達のあとを考へよう。常に、理論が發見せられて、そして、發達してゐるのである。

○ビタゴラスの音階整理と、其の後の音楽の勃興。

○グレゴリー旋法の制定と、宗教音楽の興隆。

○對位法的理論の確立と、バッハの完成。

○平均率の制定と、樂器の發達。

○和音構成理論の完成と、近代西洋音楽の發達

等々、常に、西洋音楽の發達のおかげには、理論が、はたらいてゐたのである。管絃樂法でも、唱歌法でも、演奏法でも、常に、法則性による理論によつて、感覺性の音楽が發達したのである。但し、理論家必ずしも、創作家にあらずであるが、全然理論を有せざる創作家なぞは、發見し得ないのである。

吾人は、ここに不完全極まる從來の理論なる目出しのもとに、述べようとしてゐる。而して、現代に於ける音楽理論とは、要するに、最も進歩せる、現代の西洋音楽の理論を意味するものである。以下少しく立ち入つてのべよう。

○音樂の要素

内的構成要素—旋律構造

基本的要素
母胎である音階
動物である節奏

助成的要素—内を充足する和音

外的表現要素—音色構造

人の聲音—唱歌
樂器の音—器樂

以上の表に見る如き、音樂構成要素の根本的理論に於いて、西洋音樂は、未だその關係を明らかにしてゐない。單に、

○旋律の構造

○節奏の構造

○和音の構造

○音色の構造

等、併立的に、對等的に取扱はふとしてゐる。これその理論の第一の缺陷である。従つて、旋律と和音の關係の如きはもとより、旋律に於ける節奏の位置等全然考慮せられない有様であ

る。この點、西洋音樂にのみ心酔してゐるわが洋樂家の三省すべき點であらう。

第二、西洋音樂に於て、よく呼ばれる、「は長調」「と長調」或は、「い短調」「に短調」等の、洋樂の根本である、「調名」の指定に、關してである。長調、短調は、假に、大目に見て、

○長調とは、長三和音三個にて構成せられたる即ち長音階であり、

○短調とは、短三和音三個にて構成せられる、即ち、短音階の意としよう。

而して、「は調」「と調」「す調」等の、調名は、如何なる樂音の原理によつて、決定せるものであるか、この點、極めて不明瞭である。單に、「は」音を主音にするのだ、「と音」を主音にするのだと言つた丈ではわからない。調名は、常に、主音名なのであるから。この點は、とくに、旋律の基礎に於いて、一體如何なるときに、調が決定せられ、而して、如何にして、性質が、決定せられるのであるか。斯く問はれると、洋樂は、益々あはてるにちがひない。眞の樂音の原理に於いては。



これを、普通あるように、書きかへると、次のようになる。



この関係、洋楽理論は、明示してゐない。而して、この関係は、他の例と比較すると、

とき人生樂音
過去親 ↓ 母音
現在 ↓ 自己 ↓ 主音
未來 ↓ 子音

以上、總べての理法と、完全に一致するのである。

第三には、さきに述べたる如く、音階の構成理論がない事である。和音の構成理論と、音階の構成理論とは、全く異なるべきであるにもかゝらず、流用してゐる如きは、甚だ不完全と言はねばならない。

第四に、樂音の一八音間に於ける、開展關係に關しても、又、全然考へられてゐない、この問題を解決しない限り。

○調性の決定も、

○旋律の母胎である音階も、

○西洋の音階の構成原理も、

○和音のよつてもつて立つ原理も

○十二半音の關係も、

解決し得ないのである。

第五には、音程の、音樂的意義に關する理論の確立してゐない事である。これも、極めて重要な意味を有するものである。

要するに、現在の西洋音樂の理論は、一の「和音構成の手續上の理論」以外には、全然、備つてゐないと言つて差支ない。

○美しき哉我が旋律の構造

高雅なる音階に屬する曲の例

(基本形) 君 が 代 (に調高旋主人型)

$\text{♩} = 69$



キミガ ー ヨー ハ タヨニ ー ヤチヨニ サザレ イミノ



イハホト ナリテ コケノ ムーヌー ヌーデノ

この旋律の卓越してゐる事は、我々日本人が、常に衷心から感じてゐるばかりでなく、十數年前、獨逸の大學に於いて、各國の國歌審査會が行はれた際に於いても、歌詞の上からは勿論、旋律の上からも、共に、斷然、世界一であると、推賞せられたのである。

○(第一轉回音階) 越 天 樂 (い調高旋子音形)



カサギノサヲイテシヨリ サシテユクハヤサダメナキ



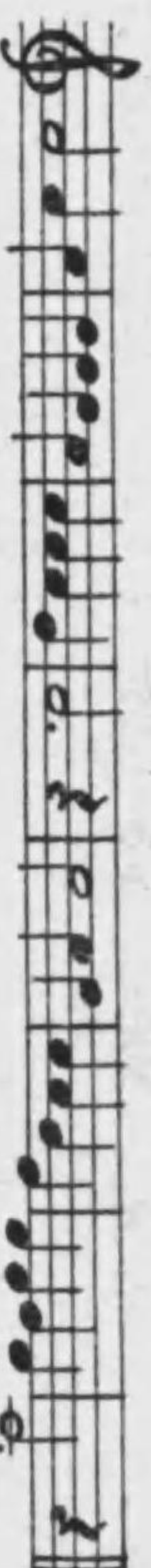
キニヲヤスルイサヲシハーニサトガハニゾノコリケル

これは、随分古い旋律である。各神社でも、よく奏されるが、この高雅なる情趣、大いに味
 方とせらる。

○(第二轉回音階) 紀 元 節 (は調高旋祖父型) 伊澤修二先生作曲



クモニビエイルタカホノ タカキオロシノクサヒキモ



ナヒキヲシケンオホシヨヲ フラグケヲコンタシケレ

この、壯重にして、神々しい旋律は、これ、我祝日唱歌中の白眉である。

高雅なる音階に

属する他の例

- 基本形 海ゆかば、四季の月
- 子音形 今様、子守謠
- 母音形 日の丸の旗、勇敢なる水兵

優雅なる音階に属する例

○(基本形) 優雅なる今様 (變口調優旋夫人型)

オモ一イ一ツルモ ナツ一カシヤ一

ナチ一ミーモ一トヲ ハチ一レキチ一

これは、讚美歌に輯録されてゐる。旋律である。讚美歌は、歌ひ易くして、性格の適切なる旋律を多く集めてゐる。その中でも、この旋律は、この歌詞に對して誠によく適合してゐる。

○(第一轉回音階) 敷 へ 歌 (嬰へ調優旋息女型)古語

ヒトツト一ヤ一ヘ一トヨ アク一レバ ニギ一ヤカ チ ニギ一ヤカ

チ一オカザリ タテタル マツカザ一リ一 マツカザ一リ

○(第二轉回音階) 子 守 唄 (嬰は調優旋組母型) 著者作曲



基本形 箏曲さくら、戦友

○優雅なる音階に
属する其他の例

子音形 通りやんせ、中國地方の子守唄

母音形 箏曲六段、荒城の月

その名も床しき、高雅なる音階、優雅なる音階の双方に對し、何れも誠によき、旋律が存在してゐる。我に絶妙の旋律ありとの著者の言決して誇言ではない筈である。

◎須らく羈絆を脱すべし

○洋々たり我が國樂の前途

國樂とは、完全なる國家の、眞實の音樂の意である。完全なる國家とは、理想的大道顯現國家の義である。人類の歴史を通じて見ても、現代の世界の状況を見ても、この意味に於いて、完全なる國家と言ひ得る國家は、我が日の本を措いては、見當らないし、且は、求め得ない。何故ならば、日の本こそは、その、中核、その根本が、世界無比に確立してゐるからである。即ち、

申すも、畏こき極みであるが、神代さながらに、御神奇にわたらせられます、大御門の、嚴として、知ろし召さるゝ、我が大皇國だからである。

この、重大にして神聖なる事實、これこそ、實に、我が大日本が、完全なる國家となり得る

根本的なる大要因なのである。

この國家を、我が有難き神ながらの道の要求せられますまゝに、完全なる國家となし奉る事、これ、我等國民の努むべき、大いなる道である。即ち、教育勅語によりて御諭し遊ばれたる「以テ天壤無窮ノ皇運ヲ扶翼スヘシ」に、御旨のまに／＼、御對へ申し上げ得る處の、皇民の大道實踐なのである。

この事に關して、切言しますと、これまで人類の史上にあらはれたる種々の問題、又、現に、あらはれてゐる種々の事件を通して大いに考究すべき數多の問題が存在してゐる。その中、特に萬人の慾望の對稱としてゐる事に關して少しく述べよう。

(一)、権力は、萬人が希求してゐるものゝようである。何故に必要なのであらうか、自己自らのためにか、將亦萬人のために、眞に行くべき「誠の道」を指示し、實行せしむべく指導せんがためにか。この點、多くの場合、誤られて考へられ、獨善に墮して行はれてゐる場合があまりに多い。日本の現在で言ふならば、

○、政黨に對する批難の根據も、

○官僚に對する或る氣遣はしさも、

○軍人政治家に對する一種の不安も、

總べて、これらの人々の、権力に對するあやまたざる理解と、實施に關する正しき教養を缺如することに起因してゐるのではなからうか。

(二)、財力は、これも、果して、特定個人にとつてのみ必要なものであらうか、貨幣が、この世に出現したる、眞正の意味を考へてみるがよい。現代の多くの人々が考へてゐるような意味に於いては、決して、その眞意義も、眞價値も、發揮し得る筈がない。常に思想問題の上に騒々しいまでに取扱はれてゐる、所謂、富の資本主義も、共產主義も、要するに、財力に對する、相等しき、所謂個人生活至上主義の僻見より生れ出でたる、人生の倚形兒なのである。

○資本主義は、盲目にして横暴なる親であり、

○共產主義は、同様にして自棄的なる子供の群なのであつて、
相共に、大いに反省し、大いに考究を要する次第である。

(三)、其他、豊富なる物資、卓越せる才能、健康と長壽、所謂、人間の力のみでなく、神の

み力によつて與へられたるものゝ、總べての意義も、決して、個人のためのみに、存在するものではない。時間的に、而して、空間的に、常に、衆と、共にの爲である。

而して、衆と共にの、最も確固たる團體は、即ち、國家である。國家こそは、人類生活の、眞實の根底なのである。(國家なる問題については、詳細なる意見を述べべきであるが、こゝには、結論丈をかゞけておく。)

この國家、人類生活の基礎である國家、これを、理想的に、顯現する事、こゝに、その國家の發展があり、人類の眞の平和と幸福とが、實現せられる筈である。而して、斯くする事が、眞實の國民の大道なのである。この大道が十分に行はれないのは、無智と無識による、國民間の所謂相剋が存在するからである。

現代に比しては、あまりに淺間しかりし時代に生れ、自らはもとより、一家一族、子孫をあげて、皇民の大道に奉仕し、殉じ果てたる大楠公は、前述の、權力、財力、それに法力に關し「非利法權天」と、嗟嘆せられて居られるが、私は、不肖を顧みず、「天奉權法利」を、理想とせよと、衷心より絶叫する者である。即ち、有意識的には勿論、無意識的にも、斷じて、私

しては不可ない。國家のために、而して一國民たる自らの眞の道のために、總べてを奉るべきである。

斯くするには、眞實の意味に於ける、最も良き教育を行はねばならない。この意味から見ると現在の教育は、その理想に於いて、その内容に於いて、而して、その機構に於いて、根本的に、大改革を要する問題があまりに多い。この點、吾人は、徹底的に沈思黙考し、大いに大觀する必要がある。現在までに、

○人類が、果して人類として育つてゐるか。

○進歩してゐると自惚れてはゐるが、歐米人それ自體が、眞に人間として育つてゐるか。

○而して、我が、日の本の民は、果して、有難き國家の民として、よく育てられてゐるか。不幸にして、私は、すべて、否、否、未だ、人類は、育つべくして、育てられてゐないので、斷言せざるを得ない。

而して、育て、育ち得る人類は、理想的國家の國民なのである。言語も、風俗も、經濟も、其の他あらゆる文化は、常に、國家に依存するものだからである。

この意味に於いて、我が國樂の前途は、誠に、洋々たりと言ひ得る。何故ならば、我が國家の前途が、誠に、洋々たるものであるからである。

但し、條件がある。それは、日本人が、音樂的にほんとうに目覺め、ほんとうに教育せられたる時である。どこまでも、どこまでも、ほんとうに教育せられ、目覺める事が必須條件である。

眞剣に、人生を考へるならば、音樂の人生生活に及ぼす影響が、如何に切實であるか、十分に感得し得る筈である。斯く感得し得た場合、現在の放送や、現在のトーキーや、現在のレコードに、果して黙してゐられるだらうか、その焦燥、その無意義、その淺薄、すべて、日本國々民の魂には、相反するものである。

斯くなるのも、空虚なる教育をうけ、無思慮なる生活機構に累されたる、獨善的小英雄氣取りの人々が、政治の要衝にあたつてゐるからである。而して、その一因は、あまりに、大都會にばかり、ウヨ／＼してゐるからである。二三年も、田舎に引込んで、晴耕雨讀によつて、大いに、身神を、養育してゐる必要があるようである。

音樂と人心に關しては、さきに説明したる、音樂の發生の點を、深く味讀する事によつて、十分に了解せられる筈である。

而して、音樂教育の普及上、最も大切で、効果の多いのは、「歌ふ事」である。神が各人に與へて下さつた、天來の樂器で、最高にして最深の表現をなす事である。その、有利なる點をあげよう。

- 一、唱歌は、最も高尚して、最も切實なる音樂表現なのである。
- 二、唱歌は、自らに關する限り、萬人に、常に、可能なる能力である。
- 三、唱歌は、最も手軽で、最も經濟的なる、音樂である。

だから、小學校のときから、滿二十歳の適齡迄、不斷に、育成するがよい。精神教育、身體教育ともろともに、但し、眞の唱歌教育が、如何に身體を強壯にし、精神を養育するものであるかを、もつと、もつと自覺せねばならない。(不明なる人は、自らの無智、無識、而して無教養の致すところであつて、斯かる人々は、國の政治、國の教育、國の文化を語るべき資格さへもない人なのである。)

中學校は勿論のこと、高等學校でも、専門學校でも、青年訓練所でも、實業補習學校や、青年學校でも、而して、農村山村漁村の青年會や處女會でも、又は、營利會社の工場でも。但し、常に、

正しき指導であらねばならない、一週一回でも、二回でも構はない。この神の與へ給へる、眞に樂しき事による、體位の増進であり、魂の育成である、このわざの指導。而して、正しき指導とは、

○好き歌を 好き態度もて思ひつゝ

高く清らかに、共に歌はん

これである。即ち、

○歌は、常に、好き歌であらねばならない。

○態度は、誠に堂々たる好き態度。

○心的状態は、歌詞の内容を深刻に省察しつゝ。

○指導者曰く、歌ひなさい。

○個人ならば、歌ひます。

○衆多ならば、共に歌ひませう。

而して、我が日本國民にとつて、最も好き歌は、「國歌君が代」ある。次には、「祝日唱歌」である。國歌と、祝日唱歌を、常に、好き態度もて、深く思ひつゝ、高く清らかに共に唱和する國民、これこそ、平時はもとより、超非常時に於ても、國民の大道を必ず實現し得る國民である事を、深く確信するものである。

然るに、現代は、威張る事や、備ける事や、見榮を張る事の教育には、やきもきするくせに、眞實の魂の教育に目覺めてゐないものだから、歌の世界に於ても、

○あしき歌を、あしき態もて、チャラ〜と

流しゆく身の、果し知らずも。

のありさまであるから、あたら尊き人生をも、浮き草の如くに流しゆく事になるのである。こんな事では、駄目である。私は、繰返して切言する「指導階級を以て任ずる人々よ、眞實に、深刻に、國家と國民と而して自己の眞人生とのために黙考せられよ」と。

唱歌を主とすべき事を、今少し切言しよう。唱歌こそは、神の興へ給へる樂器による、ほんとうの魂の玄の玄の、目覺めと、よろこびと、理想を啓沃するものであるのみならず、あらゆる音樂の規準能力を養育するものである。だから、一般的には、

○管樂器をもたなければ駄目であつたり、

○ピアノや、オーケストラでなければ音樂でなかつたりではいけない。

而して、唱歌の、好き、或は、悪しきは、一つには、歌詞でもあるが、より以上考へらるべきは、樂曲である。その中でも、旋律の母胎である音階である。

然るに、我が日本には、世界無比に卓越せる旋律構造の母胎である音階が、十分に保育せられてゐるのである。何を苦しんで、遙かに劣つてゐる、器械的物質的なる洋樂の旋律の母胎に隸屬する必要がある。斯かゝる卓越せる音樂の基礎が、かゝる國運に乗ずる、國樂の前途洋々たる、またうべなる哉と言ふべきである。

前途、誠に、洋々たる、我が大日本帝國の國威、御稜威を中心としたる大皇道の宣揚である我が國家の大發展、それは、世界史上に、繰返し、繰返し、顯玄せる、所謂「榮枯盛衰是世之

常」には、決して累せられず、齡せざる、眞實の發展であらねばならない。

而して、人類の魂に、ほんとうの、目覺めと、よろこびと、希望を啓沃してくれる、音樂の中心が日本にのみ、保存せられ、育成してゐる事の事實。

この二事實、之、我が國樂の前途の誠に洋々たる大背景であり、眞要因なのである。

斯くて、期待すべきは、我が國樂が、ほんとうに發達して、我がすべての國民の育成と團結に資するは勿論、尙ほ進んで、世界の人々に、深きよろこびと、いこひと、のぞみを興へる事である。これは大いに待望すべきであると共に、又、吾等に興へられたる偉大なる責務なのである。

○先づ自ら主人となれ

總べての成育には、常に吸收と同化が必要である。文化も然りである。我が國史の跡を見よう、そこには、絶えず、接觸讃仰、吸收同化、自主成育の過程が行はれてゐる。

佛敎の傳來の姿を見るがよい。自主成育に至るまでは、如何であつたらう。

支那文化でも同様である。長く、特有なる日本文化が遅れてゐたと思はれる迄に、吸収同化に手間どつてゐたではないか。

明治になつてから、科學文化を中心とする、西洋文明が流入するに及んで起つた状態も其の通りである、大學の講義の殆んどが、外國語であり、外國語を知らないものは、立身出世出来ない状態であつた。一時は、國語を排して、外國語を國語にしようと言つたような、人もあつたようだ。その餘蘊は、まだく及んでゐる。近頃漸く、自主的成育の面影があらはれるようになつて來たのは、非常によいが、もつと、もつと、勉強する必要がある。

音樂もである。現在は、全く洋樂時代と言つて差支ない。但し、明治教育の大缺陷である音樂教育の輕視は、全體としての日本の音樂教育の發達を阻害してゐるので、一般の人々が、音樂の眞髓にまでふれるには到つて居ないのは當然であるが、とに角、洋樂時代である。

然るに、音樂の基礎である、旋律構造の母胎である音階は、日本に於いてこそ、最も本質的にして、表現力豊かなる、「母胎群」が存在してゐる事が明らかにせられたのである。現在迄は、日本人、自らその貴さを意識し得なかつたのであるが、今後は、十分に、これを把握して、

大いに活用する事が出来るのであるが、まづ、「自ら主人となる」これが、先決問題である。

在來の日本音樂、そこには、少しも、自覺的なる、生ひ立ちが見られない。

○雅樂はその中核に於いて祭祀に用ひる部分もあるから、總べてかくせよとは、いひ得ないが、この形態は、王朝時代のものであるから、今少し考へる必要がある。

○謡曲、及類似のものは、武家時代のものである。それはそれとしてもつと考へらるべき點があらうではないか。

○俗樂、これは、徳川文化の所産である。したがつて、もつともつと考究せらるべき點が多い。私共は、

○保存し維持すべき文化と、

○創造し育成すべき文化と、

この二つの關係を判然と區別しなければならぬ、雅樂、謡曲、俗樂。これも如何にも日本のある音樂ではある。しかし、王朝時代や、武家時代や、徳川盛期が、日本の本當の姿でなかつたと言ひ得ると共に、そうした、音樂の姿が、我々の音樂である、或は、理想的音樂である

とは言ひ得ない。即ち、日本は日本でもゆがめられたる日本であつたがために、その精神的姿を切實に反映する音楽もゆがめられたる顔貌を表はしてゐるのである。精神生活と音楽、この交渉はまことに深刻なものであつて、多くの例をあげる事が出来るが、こゝには、一つの旋律が、これを動かす動因である節奏のはたらしき方によつて、如何に變つた表現になるかと言ふ例をあげよう。



これは、箏曲の初歩にある、さくらの旋律であるが、單に拍子を變化した丈でも、随分變つてくる。これを六拍子にすると、



次に三拍子では、



軍歌的リズムの二拍子にすると、



次に簡単な和絃を考へて見て、分散せしめてみると、



はじめ四小節丈でこんな工合になつてくる。

斯様した點、日本の所謂邦樂家の人々は、ちつとも研究せられてゐないようだ、尤も洋樂をやつてゐる人々でももあるが、とくに邦樂の人々は甚だしいようである。音樂の勉強は、學習或は研究の三條件である。

○まづ十分に理會する事。

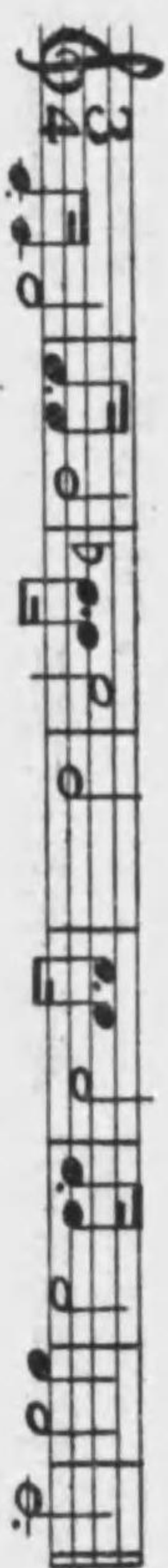
○次に廣汎に研究して覺える事。

○最後に、大いに考究して創作が出来る事

でなければならぬのであるから、各方面に關して十分に、研究、調査すべきである。例へば第一音階であるが、



この音階のまゝで一寸形を變更すると、



リズムの僅かなる變化によつて、如何に異なる感じがあらはれるものだらうか。而して、この根本は、あくまでも旋律構造の母胎である音階である事を、常に忘れてはならない。先づ自ら主人となれと言ふ事は、

○音楽は精神文化の中核である事に目覚める事。

○音楽のほんとうの構造を會得する事。

○日本の旋律構造の母胎が、最も優秀なものである事を、理論的にも、自然的にも、私に言はしむれば、感覺性に於いても、法則性に於いても、完全に把握する事。

この三要點が眼目である。ほんとうに自重して研究する事、こゝに活眼が開かせられるものである。私は、この事のために必ず近く、

○音楽原理に
現はれたる我が國體の精華

○音楽原理の大改造

なる二書を發刊する覺悟である。

而して、その創作の道に於いては、自らが原理さながらに育たなければならぬ。自らの魂がほんとうに育つとき、そこに、よき作品が生まれ得る機縁が恵まれるのである。

重ねて、自ら主人となれと、切言する。何故なれば、日本人は、日本國の日本人なのであるからである。

言葉も、風俗も、法律も、經濟も、日本のである。その日本のと言ふ事を忘れるとき。そこに何物があり得るだらう。

世の中に、よく、世界人とか、國際人とか言ふ人があるやうだ。それは、どんな意味であらうか、又は、果して、あり得べき事であらうか。

まづ「どんな言葉」でその人は生活してゐる積だらう。これに答へなければならぬ。この頃の人々は、深く深く物を考へる事に缺けてゐるやうだ。一番考へやすく、最も深い意味を有する言葉、まづ之丈でも十分考へて見るがよい。所謂世界人なんてのは、必要でもなければ又あり得る筈も、あるべき筈もなからう。フリーメイソンなる組織を有するユダヤ人、これは金で以てこの世を物しようと言ふ、よこしまなる金融資本團體にすぎない。この魔手に勝つ方法、簡單である國をあげて、日本國民としての純眞なる生活を活潑潑地に顯現する事である。つまり、あくまでも、まづ自ら主人となる事である。

音楽は、言葉のようでないと言ふかも知れぬ。しかし、音楽は、魂の生活に必要なものであつて、日常の生活に關係するものではない。而して所謂、「きもち」に關係してゐるものであ

る。世の中によくある事である。

○きもちがたいへんよいからすきだ。

○きもちがあはないからいやだ。

○きもちがすぐれないので仕事が出来ない。

この氣持に關係してゐるのが、音樂であり、そして、そのどんぞこは、旋律構造の母胎である音階なのである。自らその主人となつてこそ、

○日本人を育てる事の出来る音樂が生れるし、

○日本人のよりよきほんとうの大音樂が創造されるのである。

私は、繰返して言ふ。

○騒々しい朝の音樂放送、ぬえのような國民歌謡、焦燥氣分に充ちたるナチス張の愛國行進曲、これらはすべて、西洋音樂の奴隷にすぎない事を。而して、大いに要望する。もつとく堂々とし、颯爽たる躍進大日本の大國樂の興隆を。而して敢而言ふ怒る勿れ、大いに反省なされよと。

○而して後總べてを活用せよ

現代日本に於いて、思慮不足のためになされる、二つのあやまられ易い考方があるようである。

その一つは、國家があつてはじめて自己があるのだと考へ得ない考へ方であり、

いま一つは、日本國民であるが故に世界の人類の一員なのであると言ふ事を正しく認識し得ない點である。後者については前述してあるから、前者の誤りを指摘しておくことにしよう。

不肖著者の一身に關して考へて見よう。

○私は、如何なる親の子として生れたのか。

○私は、如何なる環境によつて育成したのであるか。

○私は、如何なる言葉で生活してゐるのか。又生活しようと欲してゐるのか。

この、三問に對する答は簡單である。

○私は生前から日本人なのであり、

○私は生れる前からの日本の現在に育てられたのであり、
○私は、日本人としてのみ生活し得るのである。

この點、考へ足りない場合、と角、個人があつて、國家があると考へられ易しい、しかし、私自身から、日本と言ふものをすべて取り去つて見よう。おそらくは、何物も残り得まい。土だつて、水だつて、空氣だつて、日本のなのであるから。この點、所謂個人主義の人々は、大いに反省せられる必要があらう。

次に、我等の、成育と、我等の活動を考へて見よう。

○まづ我等は、日本の公民として育てられ、育つべく欣求して一人前になるのである。

○次には、日本の一公民として、國家のため、自らのため、進んで世界のために活動するのである。

こゝには、常に、二つの道が行はれなければならない。

その一つは、日本國民である自覺を把握するに到る事である。即ち、

○はじめは、家の子として親に育まれる。

○次には郷土や學校によつて教養せられ、

○次に、日本の社會人として育てられて一國民となるのである。

これは、日本人として生れたるすべての嬰兒が、立派なる日本人たるべく生ひ育ちゆく正しき経路なのである。これが、國民の教育コースなのである。

次の一つは、日本國の一公民としての自覺のもとに活潑地に、生の顯現を行ふことである。これが實現の道は。

○まづ、一國民として、國家を知る事である。

○次ぎには、世界にふれて、世界と國家との關係を把握する事である。

○最後には、國家の背景のもとに、或は、國家を通して、世界人類の文化の發達、人類の福祉に貢獻する事である。

これは、育ちたる、日本人の、すべての念願であらねばならない。

日本國民たるべく育ち、日本國民として、理想を顯現する。こゝに、男女の區別も、財産の多少も、地位の上下もあるべき筈がない。すべての人が喜び勇んで、いそしみ得る、最も幸福

なる、大皇道翼賛の大道が顯現せられるのである。

音楽の道、私は繰返して言つてある。この眞の道を、

○音楽こそは、人の魂を眞に育むものである。

○音楽こそは、人の魂にみづみづしいよろこびや、いこひを、與へるものである。

○音楽こそは、人の魂に、希望をおこさせ、理想に生くべき啓示を與へるものである。

もとより、索性正しくして、好き音楽であるべきは勿論である。

この故に、音楽にとつては何よりも大切な事は、よく育まれたる音楽でなければならない。

即ち、躍進大日本帝國の皇國精神を、さながらに顯揚せる音楽であらねばならない。それには前節に述べたように、まづ、大いに自覺して、その主人となる事が先決條件である。而して次ぎには、他を、大いに研究する事である。研究したる後、自らの主人となりたる意圖のもとに、大いに創造につとむる事である。

一、先づ主人となるべく自覺する事。

二、主人となり、而して大いに他を深く、廣く、熱心に研究する事。

三、最後に、新らたなる意圖のもとに、躍進日本さながらの國樂の創造につとめる事。

斯くあらねばならない。日本音樂の現状をこの考に基いて眺むるとき、遺憾千萬なり、誠に慘たりと叫ぶもの、決して不肖獨りではあるまいと思ふ。個條をあげよう。

一、主人たる自覺何處にありや、又自覺せんとなつとめてもゐないではないか。

二、大いに研究しても、奴隸的研究ではどこに行き得るだらうか。

三、創作、奴隸的創作では、日本の理想は實現し得まい。

この奴隸的創作に關して、少しく述べよう。諸君は、經濟思想的に、共產主義を排斥してゐるであらう。これらは、共に

非眞理であると共に

非日本的だからである。

音樂に於いて如何、西洋の長音階と短音階とは、

旋律構造の母胎として非音樂的である、故に

それによる旋律は、非日本魂的なのである。

これ、奴隸的創作を排斥する所以である。

但し、中心が確立せる以上、大いに他にも學ばなければならない。日本音楽と言へば、相變らず、

○浪花節や琵琶であつたり、甚だしきは詩吟であつたり。

○長唄やら、義太夫、それに三曲合奏、少し進んでも新日本音楽程度であつたり、

○雅樂合奏もある。足りなければ、能樂は如何。

と云はれたのでは、どうも、納まりはつかない。どうしても、新たなる意圖のもとに、大々的研究をなさねばならないのだ。斯くするには、政府で、もつとく、力を入れる事である。

例へば、例の愛國行進曲である。私の立場から言へば、奴隸的だから奴隸的だと言ふが、その中では、いゝものにはちがいない。それが政府のお聲が、りのために、如何に普及してゐる事であらう。あの歌ひにくい旋律なのに、不斷にやるものだから、まがりなりにも、誰でも歌ふようになつてゐる。

政府は、一千圓を、十倍して、何故、十曲募集しなかつたらう。種々の愛國行進曲がたく

さん出るのであつたらう。こうなると、立派な「トーキー愛國行進曲」などが、極めて面白く然も、有意義に、且有効に仕組み得られるのであつたらうに、遺憾な事には、音楽には——精神的にも、技術的にも——全然育てられてゐない人々のやる事だから、現在までの處は致方もないが、今後はもつと、もつと、大いに考へねばならない。

最後に、音楽日本の興隆、即ち、我が國樂の振興は、他の精神文化の興隆と共に、戦勝や産業の勃興と同様に、我が國威の宣揚に大いなる關係を有するものである事を斷言して、筆をといめる。

發行所

昭和十三年四月十二日印刷
昭和十三年四月十五日發行

【價五拾錢】

版權
所有

著作
發行人

東京市中野區城山町七番地
五十嵐 悌三郎

印刷
人

東京市麴町區有樂町一丁目十三番地
日 永 悌 三

印刷
所

東京市麴町區有樂町一丁目十三番地
株式會社 有恒社

發行所
東京市中野區
城山町七番地
大日本國樂振興會創設事務所

告 豫 刊 近

東京音楽學校長 乗杉嘉壽先生序文

國樂振興會創設委員 五十嵐悌三郎謹著

音楽原理に
現はれたる **我が國體の精華** (菊三〇〇頁版)

音楽原理界に現るべくして未だ現はれざりし有史以來の徹底せる新音楽理論こゝに闡明せらる。而してこれ、書名の然らしむるところにして、又躍進大日本の國樂振興の大炬火たる所以なり。樂人はもとよりあらゆる知識人必讀の名著

國樂振興會創設委員 五十嵐悌三郎著

中心 **唱 歌 教 育** (四六版約五〇〇頁)

躍進大日本の國樂大振興運動のために、敢然世俗的なる生活を捨て、以て大道に立てる著者が二十年間の切實深刻なる體驗に立脚せる。大唱歌教育書である。音感教育はもとよりあらゆる問題は解決せられてゐる。敢而推奨する所以である。

終

5
2